
俺と女王様

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と女王様

【Nコード】

N3748M

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

俺の幼なじみはわがままな女王様。今日も今日とて俺は彼女に振り回されっ放し。嗚呼、俺の安息はいつたいどこに？ ヘタレなツッコミと我が道を通つ走る女王様（+）が贈る、どたばた恋愛喜劇。

A c t . 1 俺と女王様（前書き）

まずは日常編。

Act・1 俺と女王様

幼なじみという関係ほど厄介なものはない。しかもそれが生まれたときからのつき合いならば、尚更だ。

「おいそこ、邪魔だ。どけ」

おそろしく尊大な台詞と一緒に、背中にげしつと衝撃が降ってきた。

「いてっ」

前のめりになった勢いで、思わずコントローラーの操作を誤ってしまう。本来押すべきAボタンではなく、滑った俺の親指はBボタンを押していた。

次の瞬間、ブラウン管の向こうのキャラクターは見当違いな回復魔法をくり出し、敵の必殺技をともに食らった。

「あ」

「のあぁっ！」

目にも止まらぬ速さでHPが削られていき あっという間にゼ口になる。

どこか間抜けなメロディが流れ、キャラクターは地面に倒れた。

「あーあ、ゲームオーバー」

まったく悪気のない声に、俺はキツと背後を振り返った。

「てっんめえ、いきなりなにしゃがんだ！」

「だって邪魔なんだもん。どけって言ってもどかないしー」

「当ったり前えだろうがっ！ なんでわざわざ俺がどかなくちゃなんねえんだよ！？ 充分横通れるじゃねえか！」

しかし俺の睨みもなんのその。彼女はふんつと鼻を鳴らすと、馬鹿にしきった笑みを浮かべた。

「あたしが通りたいと思えば、そこがあたしの道なのよ」
横暴だ。

なんとという自己中心的な考え方。世界はあたしのために回ってんのよ、当然でしょ、と言わんばかりの彼女の態度に、俺は脱力した。「……おまえさあ、他人ひとの部屋に断りもなく入ってきて言うことがそれかよ」

「はじめの部屋はあたしの部屋なんだから、あたしのどうしようと勝手でしょ」

おまえはどこぞのガキ大将か。

「ほらほら、さっさとおどき。苑香様そのかのお通りよ」

まるで野良犬でも追い払うように、彼女はしっしと手を動かした。俺はため息をくと、なるべくゆっくりと立ち上がる。せめてもの反撃に。

「ぐずぐずすんな!」

「うお!」

すぐに蹴りが飛んできて、慌てて退避したが。

……我ながら情けない。

彼女は女王のごとき足取りで歩いていき、俺のベッドに腰かけた。わざとらしく長い髪を後ろに払いながら優雅に足を組む。サブリナパンツから覗く、白い足首を見せつけるように。

俺はテレビのほうを向くフリをして、彼女から目を逸らした。

「ほらほら、せっかくこのあたしが来てあげたのよ? さっさとお茶なりお菓子なり持ってきたさいよ」

「……別に、だれも来てくれなんて頼んでねえんだけど」

ゲーム機の電源を切りながらちらりと窺うと、彼女は不敵に微笑んだ。

「嘘つけ。嬉しいくせに」

確信に満ち溢れた言葉に、俺は一瞬、声を詰まらせた。

「嬉しくねえよ」

「素直じゃないなあ、はじめは」

彼女はにやにやと目を細めながら爪先を泳がせている。パールピ
ンクに染まった小さな爪が、桜の花びらのようだった。

「だったらなんで、部屋から出ていこうとしてるのかなあ？」

追いかけてくる声は、悔しいほどにたつぷりと余裕を滲ませてい
た。俺はドアノブに手をかけると、白旗を振るような気持ちで叫ん
だ。

「おまえが持つてこいって言ったんだろっか！」

「うん、よろしい」

彼女は満足そうに頷いた。その笑顔をかわいいなどと思ってしま
ったのは 気のせいではない。

俺は深く長いため息をついた。

まったく、幼なじみという関係ほど厄介なものはない。しかもそ
れが生まれたときからのつき合いならば、尚更だ。

家族ではなく、友達でもなく、ましてや恋人でもない、曖昧でい
ながら距離感のない関係。これほど気安く、心地いい結びつきがあ
るだろうか。

これは甘えなのだという自覚はある。どう転ぶかわからない変化
を起こすくらいなら、今のままのふたりでいたい。そうすれば、俺
は何もおおそれずに、彼女の隣にいられる。

臆病だと思う。卑怯だとも思う。だが俺はまだ、このぬるま湯の
ような幸福に浸かっていたい。

「おいこら。早くしやがれ」

「へいへい」

「返事に真心がこもってない！」

「って！ 枕投げるな！」

ドアを盾にベッドからの砲撃を回避する。「とっとと持つてこい
！」という彼女の声を背に、俺はこみ上げてくる笑いをひっそりと
噛み殺しながら、階段を駆け下りた。

未来のことはわからないが。
今はまだ、彼女は俺だけの女王様だ。

A c t . 2 臆病者の秘密（前書き）

いわゆる発端編。

Act・2 臆病者の秘密

きつとこの秘密は、だれにも言わずに墓まで持っていくに違いない。

これは幸運というべきか、それとも不運というべきか。

俺はドアを開けた姿勢のまま、目の前の光景を喜ぶべきか嘆くべきか悩んでいた。

いつものように押しかけてきた女王様の仰せに従い、ふたり分の麦茶とポテトチップスを持って階下から戻ってきてみれば、彼女はベッドの上で気持ちよさげに熟睡していた。思いきり抱きしめているのは、俺が愛用している抱き枕だ。

一瞬、据え膳だとか、棚からばた餅なんていう言葉が脳裏をよぎる。

「……いやいや、そうじゃねえだろ」

いくらハイハイもできなかった頃からのつき合いである幼なじみだからといって、普通健全な男子高校生の部屋で寝るだろうか。しかもベッドの上で。

なんだかいたたまれなくなつて、俺は無防備すぎる彼女の寝顔から視線を逸らした。

とりあえず足音を忍ばせて部屋の中に入り、そつとドアを閉める。女王様ご所望の品が載った盆を座卓の上に置くと、重いため息がこぼれた。

「なめてんのか、ホントに……」

ある意味、これは彼女が俺が信賴してくれているという証だ。だが同時に、俺は彼女にとって異性おにいではないという、無情な宣告でもあった。

素直に嬉しいとは思えない。むしろ、冗談じゃねえと吐き捨ててやりたい。

苛立ちのような、虚しさのような、苦い感情がこみ上げてくる。俺はちらりと、眠る彼女を一瞥した。

腕の中に抱えこんだ抱き枕に頬を寄せ、しっかりと瞼を閉ざしている。微かに聞こえてくるのは規則正しい寝息。目を覚ます気配はまるでない。

……いつたい、どうすればいいのだろうか。

いや、起こすべきなのだろう。そうしなければならないと頭ではわかっている。しかし 実行できそうに、ない。

俺はもう一度ため息をつく、そろりと立ち上がった。できるだけ静かにベッドへ近づく。

スカートから覗く白い膝が目に見えこんできた瞬間、思わず泣きたくなった。どうしてよりよってスカートなのだ。「あともう少し！」なんて思う余裕は、俺にはない。

抱き枕をぎゅっと抱きしめている、シャツの七分袖から伸びた細い腕。彼女に頬を寄せられている抱き枕が羨ましいとか考えてしまふ俺は、もう駄目かもしれない。

ベッドに膝をかけると、スプリングが小さく軋んだ。ひやりとしたが、彼女は睫毛の一本すら動かさない。俺は薄い肩の横に片手をつき、身をかがめた。

長い髪は首の後ろへ落ち、滑らかな頬、すっきりとした顎の線が顔になっている。生白い肌の上に俺の影が落ちた。

けれど、そのまま覆い被さることはできなかった。

彼女は寝入っている。こんなに近くにいても気づかない。

「……馬鹿にしてんのか？」

いや、違う。

無意識にこぼした恨めしげな呟きに、自嘲がこみ上げてきた。

彼女は何も知らない。恨むとすれば、幼なじみという曖昧な関係に甘んじている俺自身だ。

だから俺がどんなに苦虫を噛み潰そうが、彼女は関係ない。そもその原因を作ったのは、他ならぬ俺なのだから。

俺は中途半端に身をかがめたまま、唇を噛んだ。

ときどきわからなくなる。俺はどうしたいのか。今のまま、幼なじみという確固たるポジションを保っていたいのか。それとも、一か八かの勝負に出たいのか。

彼女に手を伸ばしたくても、拒絶されることが怖い。だったら幼なじみのままでいい。そう決めたはずなのに、齒痒くてたまらなくなる。

わがままな女王様。だがいつか、その存在は俺だけのものではなくなる。おそらく、そう遠くはない未来に。

近くて、こんなにも遠い。胸を掻きむしりたくなるような焦燥感が、じりじりと心を焼いた。

それでもなお、……手を伸ばせない。

「なっさけねえなあ、俺」

本当に情けない。あまりにも情けなさすぎて、乾いた笑いが洩れた。

ああ、けれど。

たぶん潮時なのだ。あやふやな安心感で自分をごまかすことは、もうできない。漠然と、そんな予感があった。

ならば、残された選択肢はひとつだけ。

足りないのは、手を伸ばすための勇氣。

俺は眠る彼女を見つめた。翳りのない、安心しきった寝顔。

薄く開きかけた唇に視線が留まる。

どうせ奪うのなら、正々堂々と勝負したらどうだ。

だが今の俺には、こんな姑息な手段が精いっぱいだ。寝こみを襲うなんて最低だけれど、最後のあと一步を埋めるためには、どうしても必要に思えてしょうがなかった。

彼女には秘密だ。

いや、きつとこの秘密は、だれにも言わずに墓まで持っていくに

違いない。

女王様が目覚めないよう祈りながら、俺は残りの距離を静かに詰めた。

A c t 3 青い海と試練の夏(1) (前書き)

波瀾万丈(かもしれない) 決着編。

Act・3 青い海と試練の夏（1）

01 試練の夏、来りて

夏は、試練の季節。

そんなことを言ったのは、いったいだれだったろうか。今となつては思い出せないが、聞いた瞬間、全力で頷きたいほど納得したことは憶えている。

そう。夏は試練の季節だ。

男にとって。

「青い空、青い海……そして白い砂浜で微笑む水着のエンジェルたちー！」

ガッツホーズとともに、香坂京平「かざまのけいへい」が焦げつくような陽射しにも負けないほど熱い歓声を上げた。その眦にはうっすらと涙が滲んでいる。

馬鹿だ。

「来た来た来たよ、夏休みー！ 海水浴ー！ おれはこんな熱い日々を待ってたんだあ！」

「遊びにじゃなくてバイトに来ただけだな」

灼熱の太陽に向かって吠える友人に、俺は空気の入っていない浮き輪の束を押しつけた。

「ほら、空気入れて並べてこい。ちゃんと大きさ別にだぞ」

「……おい、本原「もとはら」」

香坂は拳を下ろすと、呪い殺さんばかりの目でこちらを見た。

「おゝまゝえゝはあっ！　せつかく盛り^にに盛り上がったテンションを急降下させるようなことをお！」

「事実を言つたまでだろ。もうすぐ昼だから、それまでに終わらせとけよ」

「あーもー、この朴念仁が！　はいはい、わかりましたよゝ。働きやいいんだろ、働きやあ」

「そうそう。あ、ついでにそこにあるビーチボールとかボートもよろしく」

「何気にパシリやがってるな、こんちくしょう！」

「うがー！　つと香坂はしばらく頭を掻きむしっていたが、結局がつくりと頂^{うなだ}垂れて浮き輪の束を受け取った。

「ああ……グッバイ、おれのマーメイドたち……」

先ほどまでの暑苦しさが嘘のような、生気の薄い顔でぶつぶつと呟いている。俺はため息をつく、と、小柄なためにやや低い位置にある香坂の肩を叩いた。

「まあ、元気出せ。接客中にやっていうほど天使だか人魚だかの水着姿を拝めるし、仕事が終われば声もかけ放題だろ」

「マジでか！？」

たちまち香坂の顔に生気がみなぎる。器用だよなあ、と呆れながら、俺は期待に輝く目に頷いた。

「ああ」

たぶん。

「いよっしゃあ！　そうと来ればじゃんじゃん働いてやるぜー！　待ってるよ、渚のフェアリーたち！」

鼻息荒く、香坂は再び拳を突き上げる。……こいつ、本当に馬鹿だ。

「元気だなあ、香坂」

屋外の客席用のビーチパラサ^{みやのてんぷみ}ルを広げていた宮野照史が苦笑した。俺は肩を竦めると、もうひとりの友人の許へ向かった。

「いつものことだろ。……なんか手伝うことあるか？」

「いや、これでちょうど終わりだ」

ぱんつと張ったビーチパラサルをテーブルの中央に空いた穴に差し、宮野はひらひらと両手を振った。

「お疲れさん」

「おまえもな。これから昼だっけ？」

「ああ。飯は手が空いてるときに、各自適当に食べろってさ」

「うっわ、マジかよ」

Tシャツの胸元をつまんでばたばたと扇いでいた宮野は、顔をしかめた。

「超いい加減だな」

「まあ、しょうがないだろ。海の家バイトなんて、どこもそんなもんだ」

俺は額に浮かんだ汗を手の甲で拭った。刺すような熱気に体中の水分が蒸発してしまいそうだ。恨めしいくらい見事に晴れ上がった空を仰げば、その真ん中で太陽がきらきらと輝いている。

視線を下ろせば、視界に飛びこんでくるのは果てしなく広がる真夏の海。波頭のきらめく遙か彼方、まっすぐに伸びる水平線の上に朧な船影が見える。砂浜は海水浴客でこった返し、ビーチパラサルや人々の水着の色が目にも痛いほど鮮やかだ。

一学期を終え、ようやく迎えた夏休み。俺は友人たちとともに、海の家へアルバイトにやってきていた。期間は一週間。海の家と経営者が同じ民宿で泊まりこみだ。ハードだが、それなりに報酬はいい。

文句はない。あるひとつを除けば。

「そついや、神崎たちは？」

ふと宮野の口から飛び出した名前に、思わず心臓が跳ね上がった。「あ、ああ。店中で片づけしてる」

激しくなりそうになる鼓動を鎮めながら、できるだけ平然と答える。宮野は特に気にするでもなく、「そっか」と呟いた。

俺はこっそりため息を洩らした。

そう、文句はない。ただひとつ　彼女がアルバイトのメンバーに入っているということを除いて。

以前だったら素直に喜べたのだろうが、今はその反対だ。香坂ではないが、思わず頭を掻きむしりながら唸りたい気分だ。

なぜなら。

「男子い、そつちは終わったあ？」

ひと際明るい声とともに、店の中からこちらへやってくる姿があった。女子メンバーのひとりである水沢みずさわ明音と、……彼女だ。

他のメンバーと似たり寄ったりの、白い半袖のパーカーに灰色のショートパンツ、明るい水色のビーチサンダルという出立ち。長い髪はひとつに結い上げられ、不揃いな毛先が項うなじのあたりで揺れていた。

彼女は平均よりもやや細めの体型をしていて、そのせいか手足がすらりと長く見える。しなやかに伸びた四肢は、思わずハツとするほど白かった。

俺は一瞬、彼女の肌に釘づけになり、慌てて目を逸らした。遠慮なく突き刺さってくる鋭い視線を感じる。

睨んでいる。絶対睨んでいる。氷のように冷やかな怒気がひしひしと伝わってくる。

逃げたい。

もうアルバイトなんぞ放り出して、今すぐここから逃亡したい。

情けないと笑われようが、それが偽らざる俺の本音だった。

しかし。

現実はその甘くない。事情を知らない友人たちの手前、仕事を押しつけてひとり逃げ帰ることなんてできない。それに、彼女は決して逃げることを許さないだろう。本当なら、アルバイトのメンバーは俺を含めた男子だけだったのに、俺が海の家うみのかのアルバイトに行くいと聞くなり、わざわざ男子と同数の女子に声をかけて参加したのだから。用意周到というか、身の危険を感じるのは気のせい……ではないはずだ。

そもそもどうしてこんなことになったのかといえば 完全な自業自得だ。

俺は幼なじみである彼女に、まあいわゆる片想いというものをしていた。そしてつい最近、俺の気持ちが彼女にバレたのである。

……寝こみに口づけしようとしたところで彼女が目覚めるという、最低最悪な形で。

それ以来、俺は彼女を避けている。

わかっている。自分でも悲しくなるほどのヘタレだと思う。今までさんざん幼なじみという関係に甘んじていたくせに、勝手に焦って自滅するという、どうしようもない駄目っぷりだ。彼女に非はないのに、まるで自分が被害者のように逃げ回っている。

吐き気がするくらい、俺は臆病で卑怯だ。

それでも。

どうしても、彼女と向き合う勇氣を持てない。彼女の瞳をまっすぐに見ることができない。

そしてついに、彼女が動き出した。

逃げられない。

だったら。

「はじめ」

驚くほど近くで響いた彼女の声に、俺は思わず息を呑んだ。

「えっ、な……」

「なあにぼさつとしてんのよ。さっきの話聞いてなかったの？ あたしとあんたは売り歩き！ ほら、行くわよ」

彼女はじとりと大きな目を半眼にすると、俺の腕を両手でしっかりと掴んだ。俺よりずっと握力は弱いはずなのに、俺は彼女を振り払うことができず、そのまま引きずられるように歩き出した。

「おい、ちよっ……苑香！」

「今日ものすつごく暑いんだから。さっさと売って戻るわよ」

どんどん先に行く彼女は俺の言葉を遮るようにまくしたてると、ちらりとこちらを一瞥した。逸らすこともできず、深みのある瞳と

まともにぶつかる。

その瞬間。

彼女はすうっと目を細め、うつすらと、けれど確かに笑った。まなざしの奥に氷片を秘めたような、獲物を追いつめる獰猛な獣を思わせる笑み。

逃がさないわよと、とびきり甘く、毒々しい声でささやかれた気がした。

今は激しく太陽が燃え盛る季節だというのに、背筋を寒気が駆け抜ける。

俺に残された選択肢は、彼女に捕えられること、ただひとつ。俺の、短くて長い、試練の夏がはじまるうとしていた。

Act・3 青い海と試練の夏(2)

02 少年たちの夜

長い、本当に長い一日を終えて。

宿泊先の民宿に戻った俺たちは、風呂で汗を流し、素朴ながらも海の幸がふんだんに使われた夕食を堪能したあと、早々に男女別にあてがわれた部屋へ引っこんだ。明日に備えて、あとは寝るだけである。夜更かしできるほどの元気は残っていなかった。

俺としては非常にありがたかった。彼女と一緒にいるのは、泣きたくなるほどいたたまれなかったのだ。せつかくの夕食も味わうどころではなかった。部屋へ戻るとき、振り向いたら瞬殺されそうな視線に背中を抉られたような 気のせいではないだろう。正直、明日が怖い。

「も、もう駄目だ……」

部屋に着くなり、香坂は精も根も滓が残らないほど搾り取られたような声で呟くと、そのまま畳の上にくずおれた。

「おい香坂、寝るなら自分の布団敷いてから寝ろよ」

俯せのまま動こうとしない体を爪先でつつくと、死んだ魚のように虚ろな目が見上げてくる。

「……無理、絶対対無理。今そんな重労働したら、おれ死んじやう」
「まったく重労働じゃねえし、布団敷くだけで死ぬようなやつがいるか」

「いーるーのお！ ここにいーるーのお！ なんなのおまえ、そんなにおれを過労死させたいわけ！？」

「だから過労死するわけねえだろ！ 駄々こねてねえで、さっさと起きろ！」

「本原の鬼い！ サド！ 友人虐待で訴えてやるう！」

「そんな虐待の分類あるかつ！」

本気で泣き叫ぶ香坂。小学五年生の彼女の弟だって、こんな馬鹿らしいというか阿保らしい醜態は見せないぞ……？

「なんだあ、どうした？」

自分の布団を敷き終えた宮野がやってくると、すかさず香坂が泣きつく。

「宮野おつ、ヘルプミー！ 本原がいじめるんですけど！」

「そうなのか？ 駄目だろ、本原」

「いや、明らかにいじめてねえし。こいつが布団敷かねえって駄々こねてんだよ」

俺の反論に、宮野は腕を組んだ。

野球部でキャッチャーを務める宮野は、香坂とは対照的に大柄で実年齢よりも老けて見られやすく、こういう親父くさい仕種がよく似合う。

「まあ、かなり仕事きつかったしな。宮野は文化部だし、へろへろになってもしょうがねえだろ。俺が代わりに敷いてやるよ」

「マジで！？ やったあ、さっすが宮野！ 頼れるみんなの兄貴！」
俺は思わずよろめきそうになった。

「おいこら待て、宮野。甘やかすな！ こいつはおまえの弟じゃなくて同級生なんだぞ！」

「まあ似たようなもんだろ」

「似てねえよ！ しかも香坂のほう誕生日早かったじゃねえか！」
「そんな細かいこと気にすんなって」

あっはっはと豪快に笑う友人に、俺はこめかみに痛みを覚えた。
というか、たかが布団を敷く敷かないということに何を大騒ぎしているのだろ……。

虚しさに黄昏れていると、どこかのんびりとした声がかかった。
「僕も本原の意見に賛成かなあ」

部屋の隅を陣取るように敷かれた布団の上に胡座をかき、文庫本

を読んでいた長谷悠也^{はせ ゆうや}が顔を上げて、にっこりと笑った。

「ほら、テレビの子育て特集とかで、甘やかしすぎると将来自立できなくなるっていうじゃない。優しさも大切だけど、敢えて厳しく突き放すのも愛だと思っよ？」 『飴と鞭』って言葉もあるしね」

正論だが、ところどころにツツコミたい箇所があるのはわざとに違いない。しかし期待に添えるだけの余力はなかったので、俺は黙っていた。

長谷の言葉に宮野は目を瞬かせると、ふむ、ともう一度思索した。「言われてみればそうかもな……うん、そうだな。手を出したくても我慢して見守ることも大事だよな」

「ええ！ ちよつ、そんなあつさり！？」

驚愕に目を剥いた香坂の肩を叩き、宮野は父性溢れる笑みを浮かべた。

「がんばれ、香坂。俺はおまえならやり遂げるって信じてるぞ！」

「……………マジっすか」

いつの間にかスポ根漫画のワンシーンのようなやりとりをしているふたりからそそくさと離れ、俺は自分のスペースに布団を敷きはじめた。実は長谷の隣だったりする。

「さっきの、本原なら冴え渡るツツコミを入れてくれると思ったんだけどなあ」

つまらなそうな視線を向けてきた友人を、俺は力なく睨み返した。

「いちいち確信犯的なボケにまでつき合ってられっか……」

「友人甲斐のないやつだなあ」

くすくすと心底おかしそうに笑われても真剣味がない。

俺は黙々と布団を敷き終え、待望のシーツの海にダイブした。優しく体を受け止めてくれるやわらかい感覚に、全身の筋肉が一瞬でゆるむ。

「うお……なんかもう天国だ……」

心地よい眠りに引きこまれた意識を、しかし笑みを含んだ長谷の声が容赦なく掬い上げた。

「だいぶお疲れみたいだねえ。まあ、あれだけ殺気をビシバシ飛ばされれば神経もすり減るよねえ」

頭から冷水をかけられたようだった。

かばつと顔を上げると、爽やかでありながら腹黒さを感じずにはいられない笑顔の長谷と目が合った。

「で、神崎女史と何があつたの？」

肌の白さとは対照的な黒い前髪の奥から、同色の双眸が見つめてくる。心の奥底まで見透かされそうなまなざしは、彼の恋人のものとよく似ている。

「おかしいなあとは思つてたんだよねえ。最初は僕らだけで来るはずだったのに、突然神崎女史たちもだなんて。まあ、果林^{かりん}と一緒にいられるから不満なんてないんだけどさ」

さりげなくのろけながら、長谷はじわじわと追い詰めてくる。瞳孔と虹彩の区別がつかない瞳をよぎるのは、愉悦の光。

絶対おもちゃにされている……。

憤りたいような嘆きたいような、なんとも微妙な心境になり、俺は押し黙った。今更あだこうだと騒いだところで、長谷の性格が変わるわけではない。用意周到に張りめぐらされた蜘蛛の巣のごとく、この友人から逃げることなど不可能なのだ。おとなしく糸に巻かれ、妥協しながらつき合っていくしかない。

人生、あきらめが肝心である。

俺は、深く長く重いため息を吐き出した。

まったく、彼女といい友人たちといい、どうしてこう俺の周囲には灰汁の強い人間が多いのか。そしてなぜ、俺はそんな彼らとつき合っているのだろうか。

類は友を呼ぶ？ いやいや、俺は平々凡々な一般人だ。そのはずだ。

後ろのほうでは、宮野と香坂がまだスポ根漫画を演じているようだった。

「無理だ……っ、おれには無理なんだ！」

「逃げるな！ つらくても苦しくても、勝利はその先にしかないんだ！」

俺の本当の休息は、まだまだ先のようだった。

Act・3 青い海と試練の夏(3)

03 先手、女王様

女はこわい。

怖いし、強い^{こわ}。

ということをも、俺は痛感していた。

昨日に続いて本日も快晴、絶好の海水浴日和だ。つまり、海の家にとつては他でもない稼ぎ時。少しでもたくさんのお客を呼びこもうと、まぶしい陽射しの照りつける砂浜では熾烈な戦いがくり広げられていた。

別名、女の意地と矜持のぶつかり合い。

「ねえねえ、そこのお兄さんたちい。ちょっと寄ってかなあいい？」

「うちのお店に来てよっ、他よりもっといいサービスあるからさ！」

弾むような声を上げているのは、色とりどりの水着を身に纏った少女たち。輝くような夏空の下、惜しげもなく晒された瑞々しい肌に、行き交う海水浴客（特に若い男）が目を奪われている。

砂浜に軒を連ねる海の家は決して少なくない。それはそのまま、客引きの人数に比例する。大して広くない縄張りの限られた範囲の中、少女たちは凄味さえ感じられるような勢いで声を張り上げ、笑顔を振り撒いていた。縄張りの重なる境界線の周辺は気温が鰻^{うなぎ}のぼりだ。正直少し……いや、かなり近寄りがたい。

俺たちが働く海の家も、例に漏れず参戦中だ。他のアルバイトの女の子とともに、俺の同級生たち。もちろん、彼女も。

「休憩ならどうぞこちらへー。シャワー・更衣室、完備してまーす」
昨日と同じポニーテールにまとめられた髪。線の細い肢体を包むのは、淡いブルーの。

…………… どうしてビキニなんだよッ！

俺は思わず悶絶したくなった。 よりにもよって、ビキニ。

まだショートパンツタイプだからマシなのかもしれないが、はたしてそれがいったいなんのフオローになるというのか。その威力は核爆発にも等しいといわれる海辺の最終兵器だ。

「どうしたの、本原。今にも悶え死にしそうな顔して」

一緒に貸出し用のボートを壁に立てかけていた長谷が、不思議そうに目を瞬かせた。俺の視線の先を追いかけて、ああ、と納得したように呟く。

「さすがだねえ、神崎女史。道行く男たちの目が釘づけだよ。あんまり気づいてないみたいだけど」

長谷の言うとおり、彼女はかなり注目の的になっていた。本人にはその自覚があるようでいて、実のところあまりない。

「…………… たち悪すぎだろ」

俺の呻きに、長谷の含み笑いが重なった。

「自業自得じゃない？ あれは彼女なりの、きみへの『挑発』なんだろうし」

鋭い指摘に、俺はぐつと言葉を詰まらせた。

昨夜の悪夢が甦る。言葉の拷問によって、彼女がアルバイトに急遽参加した経緯を吐かされたのだ。俺の自白を聞き終えた長谷の第一声は、「本原って本当にヘタレだねえ」だった。余計なお世話だ。そつと彼女に視線を戻す。惚れた欲目を入れたとしても 悔しいほどに、似合っていた。

…………… 頭が沸騰しそうだ。めまいが起こりそうなほどの熱を、途端に意識する。

火を吹きそうな顔を押さえながら視線を逸らすと、生ぬるい笑みを浮かべる長谷と目が合った。

「…………… なんだよ」

「いやあ、初々しいっていうか純情っていうか…………… 本原ってかわいいよねえ」

嘆息するような声音に鳥肌が立った。

「なっ、何気持ち悪いこと言ってるんだよ！」

「失礼だなあ、褒めたんだよ？ 別に変な意味はないしね。なんて言うか、傍から見てると思わず顔がにやけちゃうような……こう甘酸っぱさが、ね」

「ね、じゃねえよ。つまり俺の懊悩を見て楽しんでるってことだろうが」

「いやだなあ。草葉の陰からそつと見守ってるって言うてよ」

「おまえまだぴんぴんに生きてるだろ！？」

ああもう、なぜこの友人との会話はこんなにも疲れるのだろう。げっそりとした気分のため息をつく、不意に長谷が表情を改めた。

心の最奥を隠すベールを容赦なく切り裂いてしまいそうな鋭いまなざしに、心臓が震え上がる。

「でもさ、本原。いつたいつまで逃げ続けるの？」

いつもと変わらない、だが氷の刃のような声がざっくりと胸を抉った。

こういうときの長谷は、本当に冷酷だ。たとえ相手がだれであろうと決して手を抜かない。

真っ黒なガラス玉を思わせる瞳から目を逸らすことも、何か言い返すこともできなかった。

「逃げて逃げて逃げて ずっとそのままでしたら、いつか追いかけてもらえなくなるよ？」

ツイ、と長谷の視線が動く。

透明な糸に引っ張られるように、同じ方向へ振り返る。瞳がたどり着いた先の光景に、喉の奥から叫びがせり上がってきた。

唇を噛みしめ、必死に抑えこむ。

彼女が 笑っていた。

その隣にいるのは、見覚えのない若い男。おそらく大学生ぐらいだろう。さっぱりとした黒髪、癖のない顔立ち。親しげでありなが

ら粘着質なしっこさを感じさせない笑顔を、他でもない彼女に向けている。

ナンパというにはいやらしさのない、爽やかな空気がふたりを包んでいた。

胸の奥がじりじりと焦げつく。肺を満たしていくきなくささに、俺は喘ぐように息を洩らした。

あんなにも無防備な彼女が放っておかれるはずがない。

わかっていた、つもりだった。

つもりだけで、ちっとも理解していなかった。

あのとき。眠る彼女を前に抱いた焦燥よりも、もっと荒々しい感情が咆哮を上げる。

食い入るような俺の視線に気づいたのか、ふと彼女の目がこちらを向いた。

小さく瞋られる瞳。そして。

白と黒に彩られた盤上に、彼女が先の一手を打つ音が聞こえた気がした。

ゲーム
試練は、すでにはじまっていた。

Act・3 青い海と試練の夏(4)

04 想いはもつれ絡まりて

自分に耳があることをこんなにも苦痛に感じたのは、生まれてはじめてだ。

あるいは、だれかの口を二度と開かないようにしてやりたいと思つたのも。

「それでそれで？　なんていうんだって？」

彼女の隣に座った水沢が、興奮した様子で身を乗り出した。短く切り揃えたショートヘアに、こんがり和小麦色に焼けた肌。男の子めいた外見に似合わず、この手の話が好物だ。

「高見沢さん。K大の二年生だって」
たかみさわ

いささか鼻息の荒い水沢に対して、彼女は落ち着いている……というか、まるで他人事のように素っ気なかった。

「K大！？　超頭いいとこじゃん！　さっすが苑ちゃん、捕まえる魚も大物だあつ」

「顔もなかなかカッコよかったよね。チャラチャラしてなくて、感じのよさそうな人だった」
まつした

水沢の向かい側で、松下果林がふんわりと微笑む。たとえるなら綿菓子やマシユマロのような、気が抜けるほどやわらかい笑顔。だが、どんな修羅場でも同じ表情を浮かべられるのだから、おそろしいことこのうえない。その視線が一瞬こちらに動いたことに気づき、俺は無理やり青汁を飲まされた気分になった。

「だけど女慣れしてそうじゃなかったか？　ああいうタイプは結構遊んでると思うぞ」

松下の隣で頬杖をつき、聞き役に徹していた丈部藍が涼しげな眉

間を曇らせた。途端に斜向かいから反論が上がる。

「んもー、わかってないなあ藍ちゃんは！ 逆にそこがいいんだよ。格好ばっかりつけたがって中身がない男よりずうっとマシ！」

「遊び人もどうかと思うが……」

女三人寄れば姦しいとはうまく言ったものだが、こちらは四人なうえにひとりでふたり分しやべる水沢がいるので、一種の騒音と化していた。女という生きものの辞書に、沈黙の二文字はないのだろうか。

「まあまあ、選ぶのは苑ちゃんだし。で、苑ちゃんはどつするの？」

「明日一緒に出かけないかって訊かれた」

「おおー、いきなりデートですか！」

「……毎度のことだが、明音。ちよつとテンションを下げろ」

「藍ちゃんが低すぎるんですう！ ねっ、果林？」

「わたしに同意を求められても困るなあ」

「ひどい！ 何気にひどい！」

「……ないのだろうな。」

俺は深々とため息をついた。向かい側の宮野は苦笑を滲ませ、その隣では長谷が悠々と読書に耽っている。嫌味さえ感じる余裕っぷりだ。

夕食が終わっているからいいものの、食事中までこれだったら心底うんざりしただろう。ハードな仕事に慣れてきたからか、隣のテーブルの面々は俺たち以上に元気があり余っているようだった。

「…………… ああゝっ、もー、うるせえッ！」

俺の隣でテーブルに突っ伏していた香坂が、唐突に吠えた。椅子を蹴倒す勢いで立ち上がると、充血気味の目でギツと女子を水沢を睨みつけた。

「人が珍しく感傷に浸ってるつてのに雰囲気ぶち壊しやがって……特にそこ！ おまえうぜえんだよ、ハイテンション女！」

「なんですってえ！？ あんたに言われたくないわよ、童顔女顔！」指差された水沢も、がたたんつと椅子を鳴らしながら立ち上がる。

激しい火花を散らしながら睨み合うふたり。いつものことだ。

「別におまえが声かけられたわけじゃねえだろうが！ 自分のことみたいに騒いでんじゃねえよ、恥っずかしいやつ！」

「あんたこそ八つ当たりしてんじやないわよ！ センチメンタルぶって、ナンパがうまくいかなかったただけじゃない。馬っ鹿みたい！」

「な、なんでおまえ知ってんだよ！」

「あんたのやつてることなんて脳味噌使わなくなっただってわかるわよ、この単細胞！」

女子のおしゃべり以上のやかましさに、俺はため息をつく気力すらなくなった。ぎゃいぎゃいと小学生レベルの口喧嘩をくり広げる彼らは、本当に俺と同じ年なのだろうか。

つき合っていられるか。

今この瞬間が、くだらないと言う価値もないほどくだらない時間に思え、俺は椅子を引いた。口論に熱中している香坂たち以外の視線が集まる。

「本原？」

宮野が不思議そうに瞬きをした。長谷は文庫本から顔を上げ、うつそりと目を細めた。

「……先、部屋戻るわ」

すべてを見透かしているだろう友人のまなざしさえ煩わしかった。俺は宮野の返事を待たずに、さっさと部屋をあとにする。

腹の底でぐらぐらと感情が煮え立っているのに、それを冷ややかに見下ろしている自分がいた。だれかを傷つけてしまいたいような苛立ちと、もうどうにでもなれと呟く疲労感がずっしりと胸の内を詰まらせていた。

もう何も聞きたくなかった。耳を塞いで、喉を切り取ってやりたかった。

そう考えることすら馬鹿馬鹿しいと笑ってしまいたかった。

だから、いやというほど聞き慣れた足音が追いかけてきたとき、俺はいつそ彼女を殺してしまおうかと思った。

「はじめ」

いつになく平坦な声に、心はいっそう荒み、冷たくなっていく。少しでもはしゃいだ素振りを見せたりすれば、こんなに苦しくなかったのに。

「……なんだよ」

振り返ると、彼女は無表情だった。色の深い双眸を細め、どうしようかとひとりごちる。

「どうすればいいと思う？」

あくまで淡々と。だがその裏に隠された計算高い期待に、本気で彼女を殺したくなった。

最低最悪な女だ。

どうしてこんなやつを好きになってしまったんだろうと思ひながら、俺は答えた。

「別に」

たとえば。

ここで行くなと言えば、きっと試練^{ゲーム}はあっけなく終了しただろう。彼女の勝利という形で。

そんなのごめんだ。

追い詰められた俺の思考は麻痺していた。

「行きたかったら、行けばいいんじゃないかねえ。俺には関係ねえし」
きつと後悔するに決まっている。

それでも、このときの俺は、放り出して逃げることを選んだ。
敵の思いどおりになるなんてまっぴらだった。

「……………あつ、そう」

彼女の声音がずっと低くなる。憤りと落胆がない混ぜになった、詰るような色が見つめてくる瞳に一瞬浮かんだ。

俺はそれを投げやりに受け止めた。

試合は、混戦へ突入しようとしていた。

Act・3 青い海と試練の夏(5)

05 結び目をほどくとき

覆水盆に返らず。こぼれ落ちた水のように、一度失われたものは決して元に戻らない。

その事実思い至ったとき、俺は壁に頭突きをかましくなった。
「女子のおしゃべり攻撃に煽られてイライラしまくった結果、自棄^{やけ}になってせつかくの降伏の機会を逃した」と

テーブルの向こうで頼杖をついた長谷は、呆れを通り越して哀れむようなまなざしを向けてきた。

「なんていうか……本原って」

「頼むから言わないでくれ。そしてそんな目で見ないでくれ」

この世から消えてなくなりたい気分とは、こんな感じだろうか。

俺は額をテーブルにくっつけながら考えた。

ひと晩経って、頭が熱いような冷めているようなおかしい状態が落ち着いた途端、俺は昨夜の自分の行動に沈没した。

後悔なんてものではない。もしもタイムマシンに乗れるなら、三回回ってワンと吠えたっていい。ドラえもん！……なんていう現実逃避に走りたくなるほど、マリアナ海溝よりも深く落ちこんだ。昼時のラッシュを過ぎ、海の家は東の間の平穏を味わっていた。俺と長谷は、宮野や香坂と交代して休憩に入り、店の隅で遅い昼食をとっていた。

「まあ、女子もちょっとやりすぎたかもねえ。あれは素で楽しんでたし」

「特におまえのカノジョとかな……」

松下経由の長谷の情報によると、昨夜の女子のおしゃべりは、彼

女の依頼による俺への精神攻撃あてつけだったらしい。道理で妙なしっこさを感じたわけだ……。

「果林のいいところは、いつでもどこでも自然体でいられるところだよ？」

「さりげなくのろけてんじゃねえよ。時と場合によるだろうが。少しはTPOをわきまえろ！」

「大丈夫。なぜか僕らがわきまえる前に、周りが僕らに合わせてくれるから」

「……おまえらって、ホント似た者カップルだよな」

「そう？ 嬉しいなあ」

「褒めてねえよ！」

ああ、もう。こんなときにもツツコまずにはいられない自分の性が悲しい。

再びテーブルに沈みかけた俺を、ほんの少し口調の変わった長谷の声が引つ張り上げた。

「でもさ、本原たちも充分似た者同士だよな」

あの心臓の裏まで射抜くような目とかち合う。

「……どこが」

「意地っ張り」

ふふ、と長谷は吐息のような笑い声を洩らした。

「きみも神崎女史も、相当な意地っ張りだよな。負けず嫌いっていうか、傍から見るとこっちが苛つくぐらい頑なになってる」

柔和な笑顔で吐かれた台詞は、長谷のひんやりとした怒りを滲ませていた。

「何をそこまで抵抗するの？ さっさと捕まってくつつけばいいのに。今はまだ笑って傍観してられるけど、そのうちみんな怒り出すよ？」

もう怒ってるじゃねえか、とは言えず、俺は口をつぐんだ。不機嫌な長谷に凶星を指すのは、火に油を注ぐことに等しい。ごまかすように焼きそばをつつくしかなかった。

「今日だって、そんなに落ちこむくらいなら止めればよかったのに」
そう。

勝手にすればいいという俺の答えどおり、彼女は例の大学生と出かけていた。休憩に入るや否や、あの水着姿のまま。すれ違い様に向けられた視線は、絶対零度を下回っていた。

「神崎女史もムキになって、ちよつとあれは危ないよねえ。どうするの？」

「……わかんねえ」

俺は箸を紙皿に置き、拳を握りしめた。

「どうすればいいか、わかんねえんだ。追いかけると逃げたくなるし、追いかけてもらえなくなるって考えたら、怖い。だれかに持つてかれるなんて我慢できねえ。……だけど」

「手に入れられるかも、なんて考えられない？」

大袈裟なくらい喉が鳴った。

「本原はさ、最初からあきらめて　ううん、満足してたよね。神崎女史のことが好きでも、追いかけてはなかった。だって隣にいられたんだから、そんな必要なかったんだ」

でも、と長谷は続けた。

「それは幼なじみっていう前提があつたからこそで、その前提が崩れてようやくきみは焦り出した。それでまあ、あんな失態をしちやつたわけだけど」

「……笑うなよ」

「ごめんごめん。それで逃げ出して、ところがどっこい相手は避けるどころか追いかけてきた。自分の完全な片想い、神崎女史にとつて自分は幼なじみでしかないと思ってたきみには、まさに寝耳に水、鳩に豆鉄砲だったわけだ」

何か少し違うないだろうか？

俺の微かな違和感を置き去りにして、長谷はさらりと、まるで明日の天気でも話すかのように最終宣告を下した。

「つまり　本原は、神崎女史の気持ちを信じられないんだらう？」

絶句、というものを俺ははじめて体験した。

俺が、彼女の想いを。彼女を。

信じられない？

「本原にとって、両想いなんて絶対ありえないことだから信じられないんだ。きみは神崎女史の隣にいたいけど、彼女の気持ちを信じられない矛盾を抱えて苦しい。これからもふたりが一緒にいるためには、恋人っていう関係じゃなきゃいけないから」

長谷は凪いだ水面のような表情で頼杖を外し、組んだ両手を口元に当てた。

……俺は。

俺にとって彼女は、だれよりも近くにいる、いてほしいと望む存在だ。

少しでもたくさんの時間を共有したい。笑顔も涙も、すべて知りたい。知ってほしい。

裏切りだとか不信感だとか、そういう次元からこの世で一番遠いはずの彼女を、俺が。

俺が、信じられない、なんて。

「そんなの……最低だ」

こぼれ落ちた眩きは、今にも消えそうなほど震えていた。

何が最低最悪の女だ。

俺が、俺こそが最低最悪の男だ。

吐き気がした。

嘘だと笑い飛ばせたらどんなにいいだろう。だが長谷の言葉はど

こまでも真実で、俺は打ちのめされるしかなかった。

死ねばいい。

死んでしまえばいい、俺なんて。

闇のような絶望に囚われかけた思考を、ふっと、長谷の声が掬い上げた。

「……所詮、部外者の僕が判断すべきじゃないけど」

彼の顔は厳しく、けれど 優しくかった。

「まだ間に合うなら、きみは最低にはならないと思う」

長谷は本当に容赦がない。相手がどんなに弱つていようと、躊躇なく鋭い真実の刃を突き立てる。逃げるな、目を逸らすなど。

それが相手を思っているからこそその行いだと、俺は知っている。

世渡り上手のようできて、本当はとても不器用なこの友人の心根を、知っている。

「すべては本原と神崎女史次第だ。ねえ、本原」

もつれて絡まり合った糸を、その固い結び目をそっとほどくように。

静かな声が、するりと俺の心に染みこんでいく。

「きみは、どうしたいの？」

どうすべきかではなく、どうしたいか。

俺は。

俺は。

Act・3 青い海と試練の夏(6)

06 きみのとなりへ(1)

泣いている女の子がいた。

さびしいと、ひとりぼっちはいやだと、泣いている女の子がいた。

泣かないで……

俺がしてやれたのは、彼女の隣に並んで俯いた頭を撫でながら、必死に慰めることだけだった。

おれがそばにいるから。ずっとずっと、一緒にいるから

彼女の涙なんて見たくなかった。

いつだって、笑っていてほしかった。

だから、約束をした。

傲慢な思いこみかもしれないけれど、俺の隣にいる彼女は、どんなときも笑顔で、楽しそうで 幸せそうだったから。

そばにいと。ずっと一緒だと。大人になろうとじいさんばあさんになろうと、決して離れないと。

約束を、した。

俺が、彼女の隣にいたかったから。

「ねえ、苑ちゃん見なかったっ？」

どこか焦っているような水沢の声に、俺は思わず振り返った。

「どうしたの？」

不安に迫り立てられたような表情で駆けこんできた友人に、松下はテーブルを拭く手を止めた。店じまいの準備をはじめていた仲間

たちの視線が、自然とふたりに集まる。

「お昼休みに出かけたつきり帰ってこないの！　もう夕方なのに……」

一瞬、呼吸が止まった。松下は眉をひそめる。

「一度も帰ってきてないの？」

「うん。交代の時間までには戻ってくるって言ったのに……苑ちゃんに限って、おかしいよね！？」

「ケータイは？」

長谷の冷静な指摘に、水沢は首を横に振った。

「つながんないの。何度かけても　電源、切れてるみたいで」

「おいおい、それって……」

声を上げた香坂は、何かに気づいたように口をつぐんだ。その隣で、宮野が腕を組んで唸る。

「神崎、だれかと一緒に出かけたんだよね？」

「昨日ナンパしてきた大学生とね」

松下は呟くように答えると、両手を固く握りしめている水沢の肩にそっと手を置いた。

「いつ気づいたの？」

「一、二時間ぐらい前。さすがに遅いと思って、でもケータイもつながんなくなつて……藍ちゃんと一緒に探したんだけど、全然見つからないの！」

水沢は唇を震わせると、崩れ落ちるようにしゃがみこんだ。

「どうしよう。苑ちゃんに何かあったらっ……」

「あっちゃん、落ち着いて」

松下は膝を折ると、水沢の背を優しく撫でた。そこへ勢いよく丈部が飛びこんでくる。

「丈部、神崎は？」

「いや……」

尋ねる宮野に、丈部は息を整えながら言葉を濁らせた。水沢は顔を歪ませ、深く項垂れた。

「それより、いやな噂を聞いた」

「噂？」

「ああ。別の海の家の店員が言ってたんだが、あの高見沢っていう大学生、ここらじゃあまり芳しくない評判で有名ならしい。見かけに似合わず、毎年何人も女を引っかけては遊んで捨ててるそうだし」

すうつと腹の底が冷えるような感覚を覚えた。おまけに、と丈部が苦い口調で続ける。

「仲間がいるらしい。そいつらも似たり寄ったりの連中だそうだし」吐息まで凍りつきそうだった。

ざわざわと頂が栗立つ。寒気を感じているというのに、握りこんだ掌の内側がじつとりと湿っている。

彼女は今、どこにいる？

最後に交わした、冷たいまなざしがフラッシュバックする。次いで、彼女に親しげに話しかけていた男の笑顔が。

彼女を手放したのはだれだ？ 好きにすればいいだなんて言ったのは、大切なものを見誤ったのは。

俺だ。

だから、俺の隣に彼女はいない。

だから、彼女がいるのは。

俺ではない、俺以外のだれかの隣。

脳裏で、白い光が爆ぜた。

「……本原！？」

驚きに染まった香坂の声が聞こえたときには、もう走り出していた。蹴るたびに舞い上がる砂は熱を失い、あたりは夕闇に吞まれつつあった。どこへ行けばいいのかわかんないと思いつかず、ただ心の叫ぶままに足を動かした。昼の賑わいが嘘のように人の声は途絶え、自分の荒い息だけが耳を掠めていく。

後悔か怒りか嫉妬か、それとも他の感情か。爆発するように噴き

出すものにどんな名前をつければいいのか、わからなかった。

ただ、ただ、彼女がいないという事実が許せなかった。俺の隣ではなく、他人の隣にいたことが我慢ならなかった。

俺以外のだれかが彼女に触れることも、笑わせることも、怒らせることも、泣かせることも、傷つけることさえ認められなかった。

笑うがいい。俺は馬鹿だ。とことん追い詰められなければわからないような大馬鹿者だ。

勝負に負けることがなんだ。雀の涙のような男のプライドを踏みにじられても、俺には譲れないものがあるのだ。

俺は、彼女が好きだ。

腐れ縁よりもたちの悪い幼なじみが。どうしようもなくわがままで自己中心的な女王様が。

守れるかどうかわからない約束に、心の底から嬉しげに笑った女の子が。

神崎苑香が。

好きだ。

ただひとりの女として想う。これからの人生すべてを捧げておかまわない。欲しい。手に入りたい。

好きだ。

好きだよ、 苑香。

おまえのことが、だれよりも。

好きに決まっている。

手遅れかどうかなんてわからない。間に合わないかもしれない。だからどうした。

奪わないでどうする。取り戻さないでどうする。

女王様の思惑も、友人たちのお節介な親切心も関係ない。俺が望むから、だからこそ。

覚醒しきつた獣が吠え猛る。荒々しい響きは身の内を駆けめぐり、俺はひたすら残照に染まる砂浜を疾走した。

Act・3 青い海と試練の夏(7)

06 きみのとなりへ(2)

空が夜の色へ塗り替えられると、海辺の街はまばゆい光を纏いはじめた。目を刺すような光の波のなかを泳いでいく人々は、どこことなく浮き立っている。

きつと傍から見た俺は、ひとり場違いな表情をしているに違いなし。ほとんど通行人を押しのけるようにして雑踏のなかを突き進む。後方から上がる非難の声にもかまう暇もなく、街を彩る光のなかにある文字を求めて絶え間なく視線をめぐらせた。

薄闇に漂うネオンライトの多くは、飲食店や土産物屋、ゲームセンターなどの看板だ。おそらく海水浴客を目当てにしたそれらのどこかに、カラオケボックスのものもあるはずだった。

男がナンパした女の子を連れこむような場所。携帯電話がつながらない場所。大人数で、何時間居座つても怪しまれない場所。何が起こつても、だれにもわからない場所。

真っ先に思い浮かんだのが、カラオケボックスだった。

長年彼女に片想いしていたとはいえ、俺にだってナンパの経験くらいはある。そういうことに対してすこぶる熱心な香坂に引きずられてというか乗せられてというか、まあ興味がないわけでもなかったのだ。

そんなとき、とりあえず向かった先がカラオケボックスだった。初対面の相手とも適当に時間が潰せ、なおかつ財布に余裕があるとは限らない学生にも手軽な料金。おまけにこちらから呼ばない限り、だれかに邪魔される可能性も低い。

そう、カラオケボックスは個室が基本だ。商売柄、防音設備も整

っている。たとえ大声で助けを呼んだとしても、溢れ返る音の洪水に掻き消され、他の部屋にいる客の耳に届くことは難しい。

腹の底からどす黒い何かがせり上がってきた。思考は冷え冷えと冴え渡り、凍りついた水面のように静かだった。

感情はとつくに沸点を通りすぎ、急激に温度を低下させていた。

それでいて、今なら簡単に人を殺せそうな衝動が渦巻いている。

「本原！」

流れていく人の波の向こうから、焦ったように俺を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、見慣れた長身が人混みを掻き分けて近づいてくる。

「いきなりひとりで飛び出すなよ！ みんなで手分けしたほうが…」

宮野は息を整えながら言いかけた言葉を、驚いたような顔で呑みこんだ。

「……本原」

「なんだよ」

「おまえ、……ごめん。やっぱなんでもない」

珍しく宮野が口をつぐむ。困惑と心配がない混ぜになったまなざしが、窺うように見つめてきた。

「その、大丈夫か？」

俺は宮野から視線を逸らした。

「別に　それより、他のやつらは？」

「女子は海の家で待機中。香坂と長谷は、街の向こう側を探してくるって」

「そっか」

ゆるめていた歩みを再び速めると、宮野が隣に並んだ。器用に人を避けながらついてくる。

「おまえ、どこ行くんだ？」

「カラオケ」

「は？」

俺はからかうように舞い踊る光の群を睨んだまま、答えた。

「カラオケなら女連れこんでもおかしくないし、密室を作りやすい。声も聞かれにくいだろ？ 確証はないけど、思いついたからには行ってみる」

「長谷もおんなじこと言ってたぞ。文部たちは街のほうまでは探してないって。ただ、向こうが車だったら……」

「そのときはそのときだ」

考えれば考えるほど、希望も絶望も生まれてくる。それでも立ち止まるわけには、あきらめるわけにはいかなかった。

「どうすんだ？」

「追いかける」

きつぱりと断言すると、宮野は沈黙した。しばらくして、ため息をつくように呟く。

「……なんか氣い抜けるなあ」

「なんで」

「だってあの長谷がカリカリするほど焦れたかったくせに、自覚した途端これだろ。なんか肩透かし食らった気分つつつか……まあ、いいことなだけださ」

苦笑の氣配につられ、俺は宮野を見上げた。だいぶ高い位置にある優しい目を更に和ませ、彼は笑っていた。

「おまえって、神崎のことだけじゃなくていろんなことに対して一歩引いてるだろ。自己主張しないつつつか、結構他人を優先してるよな」

俺は口を挟まなかった。挟んではいけないような氣がした。

「それはおまえのいいところなんだろうけどさ。手を伸ばせば届くもんまで見過ごしてんのは、かなり齒痒かったな。だからこうやっておまえから動き出して、ちよつと安心した」

そんなことを言う宮野の顔が本当にほっとしたようなものだったから、俺はなんの言葉も返せず前に向き直るしかなかった。

どうしてこうも俺の周りにはお人好しばかりいるのだろう。ふざ

けているようでいて、その根底にある思いは限りなく真摯だ。

馬鹿にすることは簡単で、だが気づかずに裏切っていたら、きつと悔やんでも悔やみきれなかった。

「だから、今度こそきつちり奪い返してこいよ。逃げるなんてナシだからな」

「……ああ」

背を叩く力強い掌に、俺ははつきりと頷いた。決意と覚悟を拳の中に握りこむ。

そして何気なく視線を向けた先に、俺は探し求めていたものを見つけた。あまりにも唐突な、あっけない発見に、思わず自分の目を疑う。

「あ、あそこ！」

遅れて宮野も気づいたらしい。それが見間違いではない何よりの証拠だと理解した瞬間、俺は走り出していった。

だれかとすれ違ったたびに体当たりするような勢いで、ひたすらカラオケボックスの看板目指して突進する。宮野とともに人混みを抜けると、薄汚れたガラスのドアを押し開いた。

「いらっしや……って、うわ！」

入ってすぐ目の前にあるカウンターでにこやかに出迎えた店員が、ぎよっとしたように身を退いた。それにかまうことなく、俺はまくし立てるように尋ねた。

「女連れで入った大学生ぐらいの男、いませんか？ ポニーテールの、水色のビキニ着た女の子と一緒になんですけど」

「え、あ……ええっと、確かご来店されたかと」

「何号室ですか！？」

「へっ？ あの、二階の二五号室……っちょ、お客さん！」

すぐに階段に向かい、一気に駆け上がる。慌てたように店員が喚いていたが、何を言っているのか耳に入らなかった。

階段を上がった先には、細い廊下がまっすぐ伸びていた。両側の壁にずらりとドアが並び、突き当たりでふた股に分かれている。あ

ちこちの部屋から洩れてくる微かな音楽が混じり合い、背中がむずむずするような不協和音を奏でていた。

俺たちは、ドアに記された部屋番号を確かめながら廊下を走り抜けた。二一、二二、二三……。

「あつた！」

宮野が声を上げた。ぴつたり閉じたドアにくすんだ金色で記された部屋番号は、二五。

俺は迷わずドアを開け放った。どっと押し寄せてくる大音量の津波。

カラオケボックスの個室のなかでは広い部類に入るであろう部屋には、人影が八つ。大学生とおぼしき男が五人、彼らと同じか少し下かという年頃の女が三人。

そこに、彼女が、いた。

突然の乱入者に固まっている他の連中と同じように、茫然と目を瞠っている。肩を竦め、壁に背を押しつけて　まるで、隣の男に追い詰められたように。

彼女の隣に座っていたのは、間違いなくあの高見沢という男だった。

俺は深く長く息を吐き出すと、部屋の中に踏みこんだ。

声にならない声で誰何してくるいくつもの視線を無視して、彼女の前に立つ。さすがに街中へ来たからか、水着の上に見覚えのあるパーカーを羽織っていた。それでも白い胸元やそこから続く滑らかな腹部は顕で、俺は臓腑が焼け爛れる錯覚を抱いた。

「……………はじめ？」

ぽかんと、そう表現するしかない顔で彼女は呟いた。俺は無言で手を伸ばすと、その細い腕を掴んで立ち上がらせた。

「帰るぞ」

力をこめて手首を握りしめると、彼女はゆっくりと瞬いた。深い色合いの瞳がようやく現状を理解したように、まっすぐ俺を見つめる。

「うん、……うん」

震える唇を引き結び、最初は小さく、次はもつと大きく頷いた。彼女の体からゆるゆると強張りが解けていく。

「お……おいおい、ちょっと待ってよ」

高見沢が引きつった笑みを浮かべ、もう一方の彼女の手を掴んだ。彼女の薄い肩がぴくりと跳ねた。

「いきなり入ってきて、それはないんじゃないの？　ってか、きみだれ？　この子は俺らのほうが先約なんだけど」

彼女の肌に触れる男の手。真っ白な半紙が悪意のような墨の色に染まっていく、そんなおぞましさ。

彼女が、汚れる。

「……手え放せ」

「は？」

「こいつに触んな」

殺意と憎悪が迸る。その毒が一瞬で全身を駆けめぐったように、高見沢の顔から血の気が引いた。

「な、なん……」

高見沢はなんとか口を動かそうとしていたが、どもるだけで言葉になっていなかった。静かに身の内を蝕んでいく昏い感情の命じるまま、男との距離を詰めかけて。

「ちょっとお客さんたち、何してんですか！」

騒々しく駆けこんできた店員の怒鳴り声に、俺は踏みとどまった。店員の登場に驚いたのか、高見沢の手がゆるんだ。俺は素早く彼女の体を引き寄せると、踵を返して宮野に声をかけた。

「宮野、行くぞ」

「ん。ああ」

「……っ、おい、待てよ！」

しつこく食い下がろうとする高見沢を一瞥すると、やつはぐっと押し黙った。盛大な舌打ちのあと、忌々しそうに目を逸らす。

彼女の手を引いて部屋を出る。戸惑いのまなざしを向けてくる店

員を無視して、俺たちはカラオケボックスをあとにした。

追いかけてくる者はいなかった。もう彼女に対してどうこうしようとする意志はないのだろう。それならそれでいい。

彼女はずっと黙っていた。俺も何も言わなかった。今はただ、掌の中のぬくもりを感じていたかった。生まれたときからそばにあった、これからもそうであってほしいと願うもの。

大切なものを取り戻せた。その事実が、ようやく安堵となって胸を満たす。

手放してしまえば、あっけなくだれかにさらわれてしまう。それが我慢できないのなら、つないだ手を放さなければいい。

なんて簡単に、困難なことなのか。

それでも、俺の答えは決まっている。迷って迷って、遠回りの果てにたどり着いた場所は、すべてのはじまりだった。

だからもう、そこから逃げ出したりなんてしない。世界中のどこを探しても、俺の居場所はただひとつなのだから。

カラオケボックスの看板が乱舞する光に埋没した頃、俺は彼女の手を握り直した。それに応えるように、儚さすら感じる指がしっかりと握り返してくる。

それだけでよかった。それ以上の言葉なんて、なかった。

Act・3 青い海と試練の夏(8)

07 いざ反撃

嵐が過ぎ去ったあとの静けさは、気が抜けるほど穏やかなものだった。

いつもと同じようっていて、確かに何かが変わっている。そんな安心感が滲んだ生ぬるい日々。

台風の日ともいうべき高見沢とは、あれからなんの接触もなかった。一度、砂浜で偶然すれ違ったときも、決まりが悪そうな恨めしそうなまなざしを投げられただけだった。もちろん受け取りなんてしなかったが。

もう彼女にちよっかいを出すつもりがないのなら、眼中に入れる必要などない。だが、もしも二度目をくり返すというのなら 相応の覚悟をしてもらおうではないか。

どうやら俺は、彼女が絡むとどこまでも残酷な人間になれるらしい。そのことに驚きつつも、心のどこかで納得している自分がいた。我ながら呆れるほど他人事めいているが、俺は案外、危うい場所に立っているのかもしれない。一步踏み外せばどこまでも堕ちていくしかないような、底の見えない闇が覗く断崖絶壁の上に。

そしてその選択を迫られたとき、もしもそうしなければ彼女を失うのだとしたら、俺は簡単に答えを出すだろう。迷いもためらいもなく、あるのはどうしようもない真実だけだから。

ようやく掴んだ揺るぎない確信を噛みしめる俺を、しかし近所のおばちゃんよりも小うるさく目敏い友人たちが放っておくはずがなかった。

「で、いったいいつになったら告白^いうのかな？」

貴重な休憩時間、俺は呼び出しを食らっていた。ちなみにここは海の家内のバックヤードで、体育館裏ではない。

いつもの胡散くさい笑顔にうつすらと青筋を浮かべ、ちつとも笑っていない目で長谷が凄んでくる。こいつがここまで感情を顕にするなんて珍しい。

「あれからもう二日だよ？　そろそろいい加減にしてくれないと、さすがに僕の堪忍袋の緒も持たないよ？」

「長谷やん、目が殺気立ってる！　視線が凶器と化してるから！」
軽く青ざめた香坂が、俺ににじり寄ってくる長谷を必死に止めようとしている。そんなふたりに、宮野は苦笑いをこぼした。

「俺も同感だな、本原。このままだと砂浜が血の海になりそうだぞ」
「やーめーてー！　マジで冗談にならないから！　長谷やんならやりかねないと思っちゃう自分がおそろしくて悲しい！」

ひいいつと悲鳴を上げる香坂に、俺は肩を竦めてみせた。

「まあ、そのときは尊い犠牲のうえで鎮まっていたくださ」

「ちよつと待つて、なんでそこでおれを見んの。宮野も『あつ、そっか』なんて顔しない！」

「くれるっていうなら、遠慮なく骨の髄までしゃぶらせてもらおうよ？」

「長谷やんも当然とばかりに乗んなーッ！」

魂の底から叫ばんばかりの香坂を、俺は生あたたかい目で眺めずにはいられなかった。日頃の鬱憤を晴らすには、俺よりもなおいじられ役の座を欲しいままにする香坂をいぢめることが一番だ。これこそまさしく香坂クオリティ。

ひととおり麗しき友愛の披露を終えたところで、俺は素直に白状することにした。ここでごまかそうものなら、本当に長谷が刃傷沙汰を起こしかねない。

「ほつとしてふやけてなかったとは言わない。ちよつと感慨にふけてた」

「それでずるずる今日までなんの行動も起こさなかった、と？」

「うん……まあ」

長谷はふう、と悩ましげなため息をついた。

「ごめん、宮野。なんか細長くて固いものくれる？」

「殿中でござるー！」

「ご乱心ご乱心つと、おまえがご乱心じやとツツコミたくなるほど喚く香坂を宥めつつ、宮野は首を横に振った。

「だめだぞ、人殺しは」

「大丈夫。証拠隠滅はきっちりするから」

「おまえなら本当にやり遂げそうだな……」

「どこのどいつのせいだと思ってるのかなあ？」

「い、ひゃい、ひひゃいひひゃい！ ほおひつはんは！」

容赦なく頬をつねり上げられ、俺は降参の意味をこめて犯人の肩を叩いた。

二十秒ほど無視されたのち、ようやく解放される。赤くなつたに違いない頬をさすっていると、もはや長谷の顔からは笑みが消えていた。

「ねえ、本原。ここまで来て逃げるなんて、本当に許さないからね？」

「だれが逃げるかよ」

むっとして言い返すと、長谷は眉間に深々と皺を刻んだ。

「……即答できるくせに土壇場になって気がゆるんじやうって、心底本原らしいよねえ」

「嫌味か」

「褒め言葉だよ？」

ようやく怒りを解いた長谷は、まあやる気は充分みたいだからよしとするよ、と愚痴るように呟いた。

「じゃあ改めて作戦会議といこうか」

「作戦会議？」

いったいなんのと首を傾げる香坂に、長谷は真っ黒な腹の中身を覗かせるような微笑で答えた。

「そりゃあもちろん、神崎女史の攻略法を」

「ぶふっ」

「汚いなあ、いきなり噴き出さないでよ」

「おまえが変なこと言い出すからだろうが！　なんだよ攻略法って！　しかもなんでおまえら参戦が前提なんだよ！？」

「目には目を、齒には齒を、助っ人には助っ人を、だよ。女子の助力を得た神崎女史にひとりでも勝てるっていうなら、いらないお節介は焼かないけど？」

俺はうぐつと声を詰まらせた。そんな自信、むしろ掃いて捨てられるほどもらいたい。

「果林は優秀だからね。太刀打ちできるのは僕ぐらいだと思うけど？　水沢女史や丈部女史も、結構容赦ないんじゃないかなあ」

頭を抱えてうずくまりなくなった。そんな俺に尻目に、自称参謀は実に楽しみに宣言する。

「さあ、反撃をはじめようか」

Act・3 青い海と試練の夏(9)

08 満開の花火の下で

夜が世界を呑みこんでも、その日は砂浜から人氣が絶えることはなかった。

昼間ほどではないが、細長く伸びた砂浜のあちこちに固まった人影が見える。その多くが波打ち際から離れた場所に陣取って、これから起きることへの期待にざわめいていた。

暗い空に雲は少なく、山吹色の月が威風堂々と輝いている。闇に溶けた波間に月影が落ちて、ゆらゆらとたなびいていた。

微かな潮風に運ばれてくる波の音にまぎらわすように、俺はこっそりため息をついた。ちらりと隣を盗み見れば、Ｔシャツにショートパンツという出立ちの彼女が膝を抱えて座りこんでいる。長い髪はいつものようにほどかれたまま、上目がちに前を向いている横顔を撫でるように小さく揺れていた。

俺は彼女と並んで地面に腰を下ろし、両手を後ろについて片膝を立てていた。彼女との距離は、およそ拳ひとつ分。周りに友人たちの姿はなく、近寄ってくる者もない。

つまり、ふたりきり。

これが自称参謀の考え出した『作戦』だった。今夜開かれる花火大会に彼女を誘って告白せよと。

……提案というよりも脅迫に近かったかもしれない。なんだかんだ言いつつ女子も乗り気だったらしく、あれよあれよという間に俺と彼女はこの場に置き去りにされた。こんなときに限って友人たちは見事な連携プレイと手際のよさを発揮する。まったくもって器用なことだ。

俺は携帯電話の液晶画面を開き、現在の時刻を確認した。花火の打ち上げがはじまるまであと少し。

この状態になってからすでに十分以上経っているが、未だに会話らしい会話をしていない。何から話せばいいのかわからない、微妙な沈黙。

いつまでも無言でいるわけにはいかないのだが、うまい言葉が出てこない。口にする前にあれこれ考えてしまい、形になりきらず溶けてしまう。

たぶんここに長谷がいたら間違いなく凶器を持ち出してるよな、と半ば現実逃避めいた考えが脳裏をよぎったとき、

「この前は、ありがと」

不意に、まるで咳くように彼女が口を開いた。

「迎えにきてくれて、ありがと」

「……ああ」

いったいなんのことかと思ったが、すぐに先日のことだとわかった。俺は鮮やかな月を見上げながら、口調を強めて言った。

「我慢できなかったから」

わずかに伏せられていた彼女の視線が浮上し、こちらを向く。俺は今度こそ彼女を見据えた。

「たとえ本気じゃなかったとしても、おまえがだれかの隣にいるなんて我慢できなかった」

彼女はじつと俺の言葉を耳を傾けていた。一言一句聞き漏らすまいとするように。

一度口火を切ってしまえば、あとはするすると言葉が溢れてきた。湧き上がる想いが水泡となって水面から現れ、弾けた瞬間、声となつて響く。

涸れることのない泉から流れ出したものが静かに胸を満たし、指先まで浸透していくようだった。

ああ、俺はこんなにも渴いていたのだ。だから苦しくてたまらなかった。

ささくれ、ひびわれていた心を潤す感情は全身はめぐり、体の奥底から力となってこみ上げてくる。

今ならなんだってできる気がした。

人を想うということは、こんなにも、こんなにも。

幸せで、胸がいつぱいになるのだ。

「おまえに試されて、本音を思い知った。俺はおまえが俺以外のやつ隣のいるなんて、いやだ。おまえは俺の隣にいてほしい。おまえの隣にいるのは、俺でありたい」

それ以上なんてない。十全であることを知ったとき、人はだれでも無敵になれる。

何かしたいと願う、その人のために。

「……どうしてそう思うの」

彼女が小さく訊いてくる。震えているような、掠れた声で。

「はじめは、どうしてあたしの隣にいたいって思うの」

波の上に映る月のように揺らぐ双眸が、どうしようもなく愛しかった。

その愛しさのままに、俺は一番伝えたかった言葉を紡いだ。

「おまえのことが、好きだから」

次の瞬間、ドオンと空気が震えた。

彼女の頬が夜目にも赤く染まり、見開かれた瞳のなかに鮮烈な光が映りこむ。ほぼ同時に空を仰ぐと、月にしだれかかるように大輪の花火が咲いた。

赤、青、緑。次々に原色の光が花びらを広げ、月の独壇場だった夜空に美しい模様を織り上げる。

満開の花火。

刹那の艶姿を網膜に残し、目を凝らす間もなく消えていく。

「……あのとき逃げたのは、なんで？」

月を背景に咲き乱れる花火を見上げたまま、彼女が問うてきた。

俺は視線を隣に戻した。

「あのとき？」

「あたしの寝こみを襲おうとしてたとき」

少し棘のある声とまなざしが返ってくる。一瞬言葉が詰まりそうになったが、どうにかため息で押し出した。

「……怖かったんだよ」

情けない限りだが、それが俺の本音だった。

「おまえに拒絶されんのが、怖かったんだ。あんな馬鹿なことして言えることじゃねえけど」

自嘲せずにはいらなかった。

彼女は再び黙りこんでしまった。きゅつと唇を引き結び、痛いくらいの強さで睨んでくる。ほんの一瞬、花火に染まる瞳が大きく震えた。

「ホンットに、馬鹿じゃないの」

くしゃりと歪んだ彼女の表情に、俺は思わず息を吸いこんだ。みるみる潤んでいく双眸に緊張してしまう。

「なんでそうやって決めつけるのよ。いつあたしがいやだって言った？　ひとりで勝手に思いこんで逃げ出して、あたしがどれだけ……」

とうとう溢れた涙が、彼女の頬を流れ落ちる。彼女は膝の上で両手を握りしめていた。

「……っ、嬉しかったのに！」

ドオン、とまた花火が上がった。

「そりやびつくりしたけど、いやじゃなかった。嬉しかったの！」
彼女は飛びこむような勢いで俺の胸を叩いた。反射的に受け止めた細い体のやわらかさに、電流が頭のとっぺんまで駆け抜ける。

胸元に顔を埋めた彼女は、本格的にすすり泣きはじめた。くぐもった泣き声に合わせて肩が震える。俺のＴシャツを掴んで放さない手を見て、俺はようやく彼女の背に腕を回した。

「……苑香」

名前を呼ぶと、彼女はますますがりついてきた。俺は唾を飲み下し、彼女を抱きしめる腕に力をこめた。

「苑香」

潮の香りに混じる彼女の甘いにおい。頭の芯が熱でとろけてしまいうそで、首筋をくすぐる彼女の髪の毛の感触に、俺はたまらず目を閉じた。

腕の中の彼女が、世界のすべてだった。

「苑香。……顔、上げて」

抱擁をゆるめると、彼女はゆっくりと面を上げた。頬に残っている涙を拭ってやると、喉を鳴らす猫のように目を細める。

……本気で鼻血を噴きそうになった。

幸福感に窒息しそうになりながら、俺は彼女の頬を両手で包みこんだ。ほとんど吐息のような声で訊く。

「キスしてもいいか？」

あの日、臆病で卑怯な俺は勇気が欲しかった。

まっすぐに彼女と向き合う勇気を。想いを告げ、そして彼女の答えを受け止める勇気を。

それは嘘ではなく、だが言い訳に過ぎなかった。

俺があんな馬鹿げた失敗をした理由は、俺が本当に欲しかったものは。

苑香。

俺だけの女王様。

「……今更訊かないでよ」

彼女らしいひねくれた返事に笑ってしまふ。彼女は拗ねたように唇を尖らせたが、やがてゆっくりと瞼を下ろした。

火花が上がるたび、鮮やかな光に彩られる彼女の顔に見とれながら、俺はそつと唇を落とした。

はじめての口づけは、彼女の涙の味がした。

Act・3 青い海と試練の夏（10）

09 されど試練の夏は続く

夏の空には、今日も太陽が輝いていた。

光の粒のような飛沫を弾いて笑う人々。砂の上に刻まれた足跡を、打ち寄せる波があつという間に消していく。だが陽気な喧騒は絶えることなく、それどころか熱気となって広がっていくようだった。

もつすっきり見慣れた光景だ。この数日のうちに日常となりつつあるそれが、なぜか愛しい。

ここにいるだれもが同じ時を分かち合い、それぞれの夏を過ごしている。まるでひとつの物語を織り成すたくさんのエピソードのよう。

俺も、彼女も、友人たちも。

「なあににやけてるのかなあ？」

含みを感じる声とともに、長谷が肩に手を置いて顔を覗きこんできた。おまえのほうこそ笑顔がにやにや言ってるぞ、とツッコみたい。

「昨夜の甘〜い逢瀬でも思い出しちゃってるの？ いやらしいなあ、本原ってば」

「違いよ！ なんで断定形なんだよ！？」

「照れない照れない。で、結局どこまでいったの？ まさかキス止まりなんてことはないよね？」

「デリカシーもプライバシーもない質問だな！ 断固黙秘する！」

「うわあ、ABCのAで満足しちゃったの？ やだやだ、これだから初心者は」

「おまえら絶対覗き見してただろーッ！？」

あまりのありえなさに切腹したくなった。だれか、だれか出刃包丁を持ってきてくれ……！

最悪だ最低だ、と地面にめりこむ勢いで落ちこんでいると、ふ、と長谷が軽い吐息を洩らして笑った。

「でもまあ、これでようやく安心できたよ。百点満点にはほど遠いけど、なんだかんだがんばってたと思うよ」

手のかかる教え子を見る教師のような目で、そんなことを言う。鼻の奥がツンとするような切なさがかみ上げてきて、俺はわざとらしく鼻をこすった。

「だれかさんたちにさんざん尻^{ケツ}を蹴っ飛ばされたからな」

「そうでもしなきゃ動かないようなヘタレだったからね」

くすりと喉を鳴らす長谷は余裕そのもので、俺は素直に降参した。「……感謝してる」

どんなに馬鹿でも情けなくても見捨てずに、最後まで手を差しのべて背中を押してくれた。

彼らにめぐり会えたことは、俺の人生における最高の幸運のひとつに違いない。

「ありがとな」

長谷はくすぐったそうに目を細めた。

「僕らは、僕らにとつての当たり前のことをしてただけだよ。……でも、その気持ちは受け取っておく」

大切にしてくね。

最後に続いた言葉に、俺は力をこめて頷いた。

「ああ」

はつきりと口にはしない。だがそれはまぎれもない、俺と長谷との彼女を思い、俺を思ってくれる彼らとの約束だった。

「……おや。噂をすればお姫様のお越しだよ」

何かに気づいたらしい長谷に促されて振り返ると、波打ち際からこちらへ向かって駆けてくる彼女の姿があった。

お姫様というよりも、女王様と称するほうがふさわしい　俺の

恋人。

そう呼べることが叶えられた、今までもこれからもただひとりの、俺の好きな人。

「また水着だけだし……」

「これから苦勞するねえ」

肩を叩く長谷の生ぬるい笑みが心に痛い。

「ふたりとも、せつかくの半日休みなのにそんなところで何してんのよ！」

再びポニーテールに結い上げた髪を弾ませながらやってきた彼女は、降り注ぐ陽光よりもまぶしかった。まっすぐ俺の傍らに寄ってきた時点で、頭のねじが二、三本ゆるんだ。

しかし、それでごまかされてはいけない。

「おまえなんで上に羽織ってねえんだよ？ あれだけ注意しただろうが」

「だって海に入んのよ？ 塩水に濡れたら、洗濯してもべたべたになっちゃうもん」

「四の五の言わずに着ろ！ あーもーいい、取ってくる！」

「ちょ、なんでそんなにうるさく言うわけ？ 日焼け止めなら、水に濡れても落ちにくいやつだから大丈夫だってば！」

「そっじゃねえ……っ！」

どこまで鈍感なんだと怒鳴りかけたとき、それまで静観していた長谷がにつこりとたまった。

「神崎女史、神崎女史。本原は妬いてるんだよ。周りの男がみんなきみのこと見てるから」

「ばっ……」

「え？」

俺は一瞬呼吸困難に陥り、彼女はきょとんと目を瞬かせた。言葉を失ったまま硬直した俺に、彼女の大きな瞳が問いかけてくる。

「そっなの？」

ここで頷ける男がいたら、そいつは勇者だと思う。

固まり続ける俺に彼女は瞬きをくり返していたが、やがてにまあと口の間を持ち上げた。

「そつかあ、そうなんだあ……つまり俺の前だけで着ろってことね？　だったら言うてくれればいいのに」

長谷と同種の表情を浮かべた彼女は、凍りついている俺から上着を奪って袖を通した。男物であるためにサイズが合わず、胸元を残して前身頃のチャックを閉めると、まるでそれだけ着ているようだ。これはこれでいい……よくない気がする。

「これでいいでしょ？」

満面の笑顔で小首を傾げ、腕にすり寄ってくる。俺はぎこちなく首を縦に振ろうとして、

「……つて、ちょ、苑香さん！？」

「なあに？」

離れようとすればするほど、彼女はますます密着してくる。腕に当たるやわらかい何かがふにやりとたわんだ感触に、俺は総毛立った。

身長差から見下ろす形になってしまふ俺の視線の先には、狙ったかのように上着から覗く彼女の胸元。白い肌に刻まれた影の意味を考えるな……！

彼女は爪先立って俺の耳元に唇を寄せると、息を吹きこむようにささやいた。

「今度はふたりっきりで来ようね。　もちろん、お泊まりで」

「ごちそうさま、と呟く長谷の声が遠く聞こえた。

一難去ってまた一難。

どうやら、俺の試練の夏はまだまだ続くようだ。

E x t r a · 1 女王様の騎士（前書き）

決着編後日談。 苑香視点。

Extra・1 女王様の騎士

「さあ泣いて喜べ、崇め奉れ。苑香様のおなりであるぞー……って」
いつものように幼なじみの部屋を急襲すると、珍しいことに彼は座卓に突っ伏して居眠りをしていた。

ちようどこちらに向けられた寝顔はなんとも無防備だ。普段は冷めたような表情ばかり浮かべるくせに、ぱかりと中途半端に開いた口から寝息を洩らしている姿は、子どもの頃と少しも変わらない。

「……もしもし、はじめさん？」

苑香ははじめに忍び寄ると、耳元にそつとささやきかけた。反応はない。思いきり熟睡している。

「まあ、あんたに狸寝入りなんて巧妙な技は無理だもんね……」

完全に寝入っていることを確認し、苑香ははじめの隣にべたりと座りこんだ。

本人はクールぶっているつもりなのだろうが、この幼なじみはおそろしく嘘や演技が下手だ。ポーカーフェイスとはほど遠い人物である。彼の友人の香坂京平は単純ゆえにわかりやすいが、はじめの場合はよくも悪くも素直なのだ。「本原くんは優しいからね」とは、人間観察が趣味という松下果林の言である。

はじめは優しい。だがそれは、ときに毒にもなる優しさだ。

「昔っからお人好しよね、あんた」

苑香は座卓に頬杖をつくとき、じつとはじめの寝顔を注視した。少し長めの前髪の下にある面立ちは、別段端整なわけでもない。もはや当たり前になってしまった眉間の皺、切れ長な一重の目、不機嫌そつに引き結ばれた唇。たいてい抱かれる第一印象は「とっつきにくそう」だ。だからこそ苦笑をこぼす瞬間のやわらかさなどといったら、軽く椅子から転げ落ちるような衝撃である。

当の本人は知りもしないが、そのギャップに打ちのめされる異性はいないわけでもない。なんだかんだ言いつつも放り出さずにつき

合いきる面倒見のよさに、特に同学年や後輩の女子からは受けがよかつたりする。現に、女の子同士の他愛ないおしゃべり　つまる　ところ恋愛話の最中に、ふとはじめの名前が挙がるのがそれなり　にあった。

おそらく本気だっただれかもいたのだろう。だというのに、はじめに近づく者がいなかったのは、間違いなく自分のせいだ。

他者の入りこむ隙がないほど、はじめの瞳はまっすぐに苑香だけを見つめていたから。

はじめの目に『女』として映るのは苑香だけ。それ以上もそれ以下もない。至極単純で、だからこそ揺るぎない事実、彼の優しさに惹かれた者は叩きのめされる。

だからはじめは優しく、残酷なのだ。

わかっているからこそ彼のそばにいる人々は、はじめをそういう対象には捉えない。特別や大切に思っても、それはあくまで仲間や友人として。

はじめに恋するのは、あまりに痛くてつらすぎるから。

裏を返せばそれは自分にも通じることだが、どうでもいいような他人にくれてやる優しさなどあいにく持ち合わせていない。人間関係を成り立たせるうえで必要な場合もあるが、それですら最低限である。

そもそも苑香は優しさを与える人間ではない。記憶にも残らないような昔から、自分はずっと与えられてきた。目の前で眠る少年から、惜しみないほどの想いとぬくもりを。

絶え間なく降り注ぐ慈雨のようなそれを、いかに多く受け止めるか。苑香はずっとそんなことばかり考えてきた。だから他人に優しくするどころか、はじめに報いることすら難しいような女になってしまった。

申し訳なさが無いわけではない。だがそれよりも、納得する部分が大きかった。当然だわ、だってこいつはあたしのものなもの。

「……我ながら、ホント独占欲の塊よねー」

苑香はしみじみと呟くと、ちよんとはじめの頬を指先でつついた。ぴくり、と微かに頬が動く。

それでも目覚める様子のないはじめの顔に、ぼんやりとした面影が重なった。今よりもずっと幼く、屈託のなかった男の子。苑ちゃん、と舌足らずに名前を呼ぶ声が甘く甦る。

あれは弟の彰あきが生まれたばかりの頃。

それまで自分だけのものだった両親を新参者に奪われてしまった。お姉ちゃんだからと諭されても、はじめて見る小さな赤ん坊を自分の弟だと可愛がる余裕は、つい先日までひとりっ子だった甘えん坊にはなくて。

お母さんもお父さんも、もう苑香なんていないんだ！

さびしさと悲しさが喉の奥までいっぱいになって、もう勝手にしなさいと母に放り出されるまで泣きじゃくった。

止まらない涙、押し寄せてくる絶望と孤独。このままひとりぼっちで死んでしまうのではないかと恐怖に閉じこめられたとき、まるで正義のヒーローのように彼は現れた。

おれがそばにいるよ

大人になっても、おじいちゃんとおばあちゃんになっても、ずっと一緒にいるよ。苑ちゃんのそばにいるよ。

泣かないで……

隣に寄り添って、しまいには自分が泣き出しそうになるほど必死に慰めてくれた。脱水症状を起こすのではないかというほど泣き続けて、ようやく苑香の涙が収まるまで、そばにいてくれた。

あのときだ。

あのときから、はじめは苑香のものになった。

「ねえ、はじめ……あの約束、憶えてる？」

問いかけつつも、苑香には確信があった。そうでなければ、今のふたりの在り方はありえない。

苑香にしてみたら、ようやくここまで来たか、である。互いの胸に抱えた想いが同じものだと感じたときから待ち続けていたとい

うのに、この男ときたら「拒絶されるのが怖かった」などとのたまう始末。

「あんたってホント鈍感よね……」

自分と同じぐらい、よそ見なんてする暇もなく注がれる苑香のまなざしに気づかなかったとは。

だから勝負に出た。あまりの泥仕合に、思いがけずこちらも追い詰められてしまったが、それでも勝利をもぎ取った。

手に入れた。今度こそ本当に、完璧に。

「約束、最後まで守ってもらうからね」

大人になっても、おじいちゃんとおばあちゃんになっても、ずっと、一緒。

苑香は一度手を引っこめると、今度ははじめの頬に掌を添えた。

昔よりも頬骨が張り、顎にかけての輪郭がずいぶん鋭角的になったふと、むせ返るような夏の夜の空気を思い出す。抱きしめられた腕の力強さ、すがりついた胸の広さ。

体の奥底に火を点すような、掠れた呼び声を。

「はじめ」

頬杖を外して顔を傾け、苑香ははじめの顔を覗きこんだ。伏せられた睫毛が意外と長い。

そろそろ眠れる王子様に目を覚ましていただきたいのだが。

いや。

「あんた、王子様って柄じゃないわね」

王子様にしては情けなさすぎる。下僕　　というのはあまりロマンチックではない。

苑香はしばらく沈思していたが、ふつと唇を綻ばせた。

「さしずめ、騎士^{ナイト}ってどこかしら」

約束を交わした遠い日から、苑香のそばにいる　　さびしがり屋な女の子を守り続ける優しい騎士。

今までも、これから。いつまでも。

それはきつと、永遠。

途方もない幸せを思い描きながら、夢から騎士を呼び起こすために、女王様はやわらかな唇を寄せた。

あのかきは照れくさくて言えなかったけれど、白状するわ。
大好きよ。

あたしの騎士様。

Extra 2 ぼくの家族（前書き）

決着編その後。苑香の弟・彰視点。

Extra・2 ぼくの家族

ぼくの家族

五年一組 七番 神崎彰

ぼくの家族は、お父さんとお母さんと姉ちゃんとぼくの四人家族です。だけど、ぼくには姉ちゃんのほかにもうひとり兄弟がいます。それは、ぼくの家となりに住んでいるお兄さんです。

「ただいまあ」

ちよつと重い玄関のドアを開けると、階段の上からいつものように賑やかな声が降ってきた。

「ちよ、おま、いったいどこ触ってんだ！？ 他人^{ひと}をベッドに押し倒すな、ほくそえんで舌なめずりすんな！」

「あーら、別にあたしの部屋で何しようとかあたしの勝手でしょ？」

父さんは仕事、母さんは近所の奥様方とシヨッピング。今はこの家にふたりつきり と来りやあ、やることなんて決まってるじゃない

「決まってたまるか！ 時と場所を考えろ！ もうすぐ彰が帰ってくるだろうがっ」

「ごちゃごちゃうるさいわね！ 『据え膳食わぬは男の恥』って言葉知らないわけ！？」

「この状況のどこが俺にとって据え膳だと!?　むしろおまえの据え膳だろうがッ」

……ぼくは大きく息を吸いこんだ。

「た、だ、い、ま!」

途端、シーンツと二階が静まり返る。ひと呼吸置いて、どたばたと慌ただしい物音が階段を転がり落ちてきた。

やれやれとため息をつき、ぼくはようやく家の中に入ることができた。脱いだスニーカーは、几帳面に並べてあるぼくのものより大きいスニーカーとちよつと小さいローファアの横に置く。「靴はきちんと揃えて置くように」って、兄ちゃんから口を酸っぱくして言われている。

洗面所で手洗いとうがいをして（これも兄ちゃんからの厳命だ）ダイニングに行く。テーブルの上にはお母さんからの伝言メモと、箱に入ったドーナツが置いてあった。

「彰くんへ」

お母さんはお友達とお買いものに行ってきました。今日はお姉ちゃんが早く帰ってくるそうなので、お腹が空いたらは一くんに何か用意してもらってください。

お母さんより」

……メモを読んで、ぼくは微妙な気持ちになった。

『はーくん』とは兄ちゃんのこと、ぼくの家のお隣さんである。

ぼくの姉ちゃんと同級生で、もっとというと姉ちゃんのカレシだ。

兄ちゃんはとても真面目で面倒見のいい人で、姉ちゃんよりもよっぽど本当の兄弟のようにぼくをかわいがってくれる。今日みたいにおやつを買ってきてくれたり、宿題を見てくれたり、休みの日には遊びに連れていってくれたりする。

お母さんはそんな兄ちゃんを我が子以上に信頼していて、常々「はーくんは任せておけば、苑ちゃんも彰くんも問題なしね」なんて

笑顔で言っている。お父さんは、複雑そうな無表情で黙っているけれど。

「だからっておやつを用意まで当てにするのはどうかと思うよ、お母さん」

ぼくはぼそりとツツコンだ。たけどそんな期待を裏切れないところが、兄ちゃんの兄ちゃんたる由縁……なのかもしれない。

箱を開けると、中には色とりどりのドーナツが並んでいた。ぼくは浅い皿を三枚用意すると、兄ちゃんと姉ちゃんの好きなものをそれぞれひとつずつ乗せた。最後に自分の分を選ぼうとして、ちょっと迷う。結局、最近CMで「新発売！」と宣伝しているものに挑戦してみることにした。

冷蔵庫からジュースを出して、三人分のグラスに注ぐ。ドーナツと一緒に皿に乗せて、そうつと二階へ運ぶ。背中のランドセルが厄介だ。

なんとか階段をのぼりきると、姉ちゃんの部屋のドアがちよっぴり開いていた。道理でよく声が聞こえたわけだ。

ぼくは念のため、ドアから少し離れた場所で声をかけた。

「兄ちゃん、両手塞がつてるからドア開けて！」

ばたんつと弾けるようにドアが開いた。自分で開けたのになぜかびっくりしている兄ちゃんが、ぱちぱちと目を瞬かせた。

「ああ……彰、おかえり」

「うん、ただいま。ドーナツ持ってきたよ」

「あ……ありがとな。重かっただろ」

「大丈夫だよ」

兄ちゃんは困ったように苦笑いすると、ひょいっとぼくの手からお盆を取り上げた。「一緒に食おうか」というお誘いをもらってから部屋の中に足を踏み入れる。

姉ちゃんはベッドに腰かけて腕を組み、吹雪のような目でこちらを睨んでいた。ぼくは同じくらい温度を下げた視線をお返ししてやった。

「……お邪魔虫め」

憎々しげな呟きに、ぼくは肩を竦めてみせた。うわあ、舌打ちつてこんなに大きく響くんだあ。

「おまえなあ、実の弟に向かって舌打ちするなよ!」

「神崎家の家訓は『素直に生きる』よ」

「……納得しちまう自分が悲しいんだけど」

遠い目をしつつ、兄ちゃんは座卓の上にドーナツとジュースを置いていく。ぼくはランドセルを下ろして兄ちゃんの隣に座った。

「兄ちゃん、ドーナツわざわざありがとう」

「いや、おまえが昨日食べたと言ってたからさ。ちょうど半額券もらったところだったから」

目つきがいいとはいえないのに、兄ちゃんの笑った顔はとても優しい。兄ちゃんに頭を撫でてもらうのと同じくらい、ぼくはこの顔が好きだ。……兄ちゃんには内緒だけれど。

「あ、た、し、が、食べたいって言ったからよ!」

兄ちゃんを挟んで反対に座った姉ちゃんが余計なことをつけ加える。ぼくはしみじみと呆れた。

「姉ちゃんってさ、ホントに兄ちゃんのこと大好きだよ」

兄ちゃんが盛大にむせた。姉ちゃんは眉を片方跳ね上げ、それからとろけるように微笑んだ。

「だから、あんたにだってあげないわよ」

「別にいいよ。だって、どうせそのうちホントの兄ちゃんになるんだし」

ぼくはいただきますと手を合わせてから、ドーナツにぱくりとかじりついた。うーん……まあまあかな。

隣の兄ちゃんは、すっかり息も絶え絶えになっていた。

「なっ、ちょ、何言ってるんだ!？」

「だって兄ちゃん、そのうち姉ちゃんと結婚するんでしょ？ 姉ちゃんが兄ちゃんとやっこさっとかくつついたってお母さんに報告した日の夕飯、お赤飯だったし。お母さんすっかり舞い上がっちゃ

って、ネットで流行りの結婚式場とか探してたよ。お父さんは『はじめくん、夫婦円満の秘訣は忍耐だ。とにかく忍耐だ……』って空の彼方に呟いてたけど」

「おばさん……おじさん……っ」

兄ちゃんのはがくりと座卓に突っ伏した。それを横目に、姉ちゃんのはひたすら満足げににやついている。

「ちなみに、おばさんからは『初孫はぜひ女の子で』ってリクエストされてるんだけど？」

兄ちゃんのお母さんであるおばさんは、うちのお母さんとツーでカーな間柄だ。そこに姉ちゃんが加わると、兄ちゃん曰く『鬼に金棒どころか機関銃が備わったようなおそろしさ』らしい。

女傑三人衆の集中砲火を浴びた兄ちゃんは、もはやぐうの音も出ない様子だ。ぼくはなんだかわいそうになって、慰めるつもりで話そうと思っていたことを切り出した。

「大丈夫だよ、兄ちゃん。そんなに恥ずかしがらなくても、みんな知ってるから。だってぼく、作文に書いたんだもん」

「……は？」

兄ちゃんは顔を上げると、ぽかんと目を丸くした。姉ちゃんが怪訝そうに眉根を寄せる。

「いったい何を？」

「夏休みの宿題で、『ぼく・わたしの家族』ってテーマで作文を書いたんだ」

ぼくは掌についたドーナツの屑を払い落としながら答えた。

「ぼくには姉ちゃんの他に兄弟みたいな人がいて、いつか姉ちゃんと結婚してホントの兄ちゃんになってくれるから、それがとても楽しみですって」

沈黙が落ちた。

兄ちゃんと姉ちゃんは、揃って絶句していた。しばらくして、兄ちゃんは湯気が立つような勢いで真っ赤になり、ばたりと床に倒れこんだ。姉ちゃんも頬を赤くして、「あんたって、馬鹿じゃないけ

ど阿呆よね……」と呻いている。

ぼくはそんなふたりの様子を眺めながら、にんまりと笑ってやった。さんざん弟をやきもきさせてきたのだから、これぐらいの仕返しは我慢してほしい。鈍感で臆病な兄ちゃんと、わがままで意地っ張りな姉ちゃん。どうしようもないふたりだけれど、ぼくにとつてだれよりも幸せになってほしい人たちなのだから。

前言撤回。兄ちゃんと姉ちゃんと一緒に食べるドーナツは、やっぱりおいしいに決まっている。

ぼくは、お兄さんと姉ちゃんが一緒にいるところを見ることがとても好きです。笑い合っているふたりを見ると、なんだかぼくまで嬉しい気持ちや楽しい気持ちになってくるからです。

だけど、お兄さんと姉ちゃんはいつもふたりつきりじゃなくて、ぼくも仲間に入れてくれます。すると、ぼくは二倍も三倍も幸せになるのです。

ぼくをいつでも世界で一番幸せにしてくれるぼくの家族は、最高の家族です。ぼくは、ぼくの家族が大好きです。

S p e c i a l ・ i きみのためにできること（前書き）

2007年クリスマス企画。高校一年生のふたり。

Special・1 きみのためにできること

ピピッと試合終了を告げる電子音が静かに鳴った。

俺は唾を飲むこむと、そろそろと腋わきの下から体温計を引き抜いた。ベッド脇で控えている審判にそれを渡す。審判は無表情に体温計を見つめ、ゆっくりと口を開いた。

さあ勝利の女神よ、今こそ俺に微笑めえ！

「三十八度二分」

一発KO負け。

「はい、今日は一日中寝てるの決定ね」

無情な判定に、俺はベッドに崩れ落ちた。

「そ、そこをなんとか……！」

「なんとかなりません。ほら、さつさと布団の中に入んなさい」

審判は軽やかに俺の訴えを無視すると、さつさと布団を被せてきた。さすが俺の母親だ。

「お友達にはお母さんが連絡しとくから、おとなしく寝てんのよ？
わかった？」

ん？ て顔を覗きこんでくる母さんに、俺はため息混じりの顔を返すしかなかった。

「……………了解」

正直なところ、布団にくるまった途端に「あ、こりゃ駄目だ」と思った。全身から力が抜けて、とうてい起き上がれそうにない。脳味噌が煮え立っているような熱と痛みに、頭の芯が痺れてくる。目を開けていることさえ億劫になってきて、俺は瞼を閉じた。

今頃友人たちは、カラオケボックスで大いに盛り上がっているのだろうか。たぶんトップバッターは香坂だ。もしかしたら、水沢とマイクをめぐっていつものように喧嘩しているかもしれない。それを見て、みんなが笑って。

彼女も、一緒に。

……ああもう、今日は最低最悪のクリスマスだ。

ひんやりとした感触を頬に覚え、俺は薄く目を開いた。

ぼんやりと滲んだ視界に人影が映りこむ。だれだろう、母さんだ
るうか？

「目、覚めた？」

しかし耳元で聞こえた声は、ここにはいないはずの彼女のものだ
った。

朧な輪郭が、やがて見慣れた幼なじみの顔を形作る。伏し目がち
に覗きこんでくる双眸。俯いた睫毛の長さまでわかりそうだ。

普段なら耐えきれないような至近距離も気にせず、俺はぼつと
彼女の瞳を見つめ返した。

「……逃げないのね、いつもは逃げるくせに」

だいぶ重症ね、と彼女はひとりごちた。

「冷えピタ、貼り替える？ 氷枕は？」

「……大丈夫、だ」

どうしたのだろう、彼女が優しい。あの、わがまま放題の女王様
が。いや、そもそもどうして彼女がここにいるんだ？

……ああ、夢か。

熱に浮かされて彼女の夢を見るなんて、俺の頭は相当やられてしま
っているらしい。嬉しいやら虚しいやら、俺はどれだけ彼女のこと
が好きなのだろう。

滑らかな指の腹が優しく頬を撫でる。頬を包みこむ掌の冷たさが
心地いい。

だが今の俺に心地いいということは、彼女の手はかなり冷えきっ
てしまっている状態だ。

「……手」

「え？」

「冷てえ……」

「ああ。戻ってくるとき、手袋し忘れちゃったのよ。あんまり急いでたから」

珍しい。あんなに手が荒れると言ってまめにつけていたのに。

ふと、どうしようもないほど都合のいい考えが思い浮かんで、俺は口の端を持ち上げた。

「……そんなに俺が心配だった？」

いつもの俺なら、絶対訊けない質問だ。

彼女はくりりと目を丸くして　ふんわりと、それこそどんなクリスマスケーキよりも、甘く、やわらかく微笑んだ。

「当たり前でしょ」

……脳味噌がとろけるって、こういうことを言うのだろうか。

熱と頭痛とは違う原因で意識が麻痺しそうだ。

やっぱり夢なんだなあ、と俺は納得した。現実の彼女がこんなことを口にするはずがない。

ああ、けれど。

こんな幸せな夢が見れるなら、クリスマスに風邪を引くのも悪くないかもしれない。

「はじめ」

「んー……？」

再び霞みはじめた視界の向こうから、彼女がささやいてくる。

「そばにいるから」

「……ん」

「あんたがしてくれたみたいに、そばにいるから」

穏やかな波にさらわれるように、ゆっくりと彼女の声が遠のいていく。いつの間にか瞼が落ちたのか、目の前はまどろみの闇に満たされていた。

「……だから早く、元気になって」

吐息のような呟きは、まるで泣き出す寸前のように震えて聞こえた。

大丈夫だと伝えたくて、俺は冷たい彼女の手に自分のそれを重ねた。どうか俺の熱で彼女があたたまるように、サントクロースに願いな

S p e c i a l ・ 2 俺と女王様の願いごと（前書き）

2008年七夕企画。 日常編と発端編の間。

Special・2 俺と女王様の願いごと

憶えている限り、俺が七月七日の夜空にかけた一番古い願い事は、『おとうとかいもうとがほしい』だった。

ちょうどその頃、幼なじみの彼女に弟が生まれ、俺は悔しくて羨ましくてしょうがなかったのだ。結局その願いは叶えられず、俺は現在に至るまでひとりっ子のままなのだが。

そして次の年は、確か……。

「なあにぼんやりしてんのよ。まだ書けてないの？」

尖った口調の彼女の声に、俺は回想から引き戻された。至近距離から睨んでくる瞳に、思わず仰け反る。

「っ、……びつくりさせんな！」

「別に驚かせるようなことなんて何もしてないじゃない。それより、さっさと書きなさいよ」

この鈍感娘が！ と俺は心のなかで毒づいた。きっとこの女には、恋する男の純情なんぞ一生かかっても理解できまい。

雲の上の恋人たちが、一年に一度の逢瀬を許された夜。「ハーゲンダッツのストロベリーが食べたい」と突然言い出した女王様のわがままを叶えるべく、コンビ二エンスストアへやってきた俺たちは、なぜか飾りつけられた笹の前で短冊とペンを手にしていた。

どうやら店のちょっとした企画らしい。ドアの脇に笹が立てられ、その前に置かれた机の上には、色とりどりの短冊とペンが並んでいた。

面白がった彼女に引きずられ、俺も渋々ペンを取った。色紙を切って作っただけらしい短冊に、ふっと懐かしい記憶が甦ってきたのだ。

そういえば、あのとき小さかった彼女は何を願ったのだろう。

「ほら早くう。せっかく買ったアイスが溶けちゃうでしょー」

「おまえがやり出したんだろうが！ 少しは協調性っていうものを身につける！」

身勝手極まりない言い分にツッコみつつ、俺は彼女から見えない角度で短冊にペンを走らせた。笹の葉のなかへ隠すように、枝へ紐を結びつける。

「ちよっとちよっと、いったい何書いたのよ？」

「だれが教えるか。プライバシーだ、プライバシー」

「あんたにプライバシーなんて上等なもんはないわ！」

「おまえ、俺をなんだと思ってるんだ！？」

縁に埋もれた短冊へ手を伸ばそうとする彼女の背を押し、俺は逃げるように帰路へついた。店の前でぎゃあぎゃあ騒ぐ若い男女に注がれる視線なんて耐えられるものではない。

家に着くまでの間、ご機嫌斜めの女王様はずっと文句を洩らしていたが、俺は決して口を割らなかった。

言えるわけがない。

彼女が好きな空色の短冊に書いた願い事。めぐり逢うふたつの星に託した想い。

『ずっと一緒にいられますように』

だれと、なんて今更だ。

幼かった彼女と、大きくなった彼女が同じことを願ったと俺が知るのには、もう少しだけ先の話。

S p e c i a l 3 俺と女王様と悪魔くんの初夢パラドックス（前書き）

2009年新春企画。『となりの悪魔くん』シリーズとのクロスオーバー！。

Special・3 俺と女王様と悪魔くんの初夢パラドクス

これは夢だ。夢に決まっている。

よし、とりあえず落ち着いて頬をつねってみよう。……痛い。

肉をつままれ、引つ張られる地味な痛さ。

「よくできた夢だな……」

「何ひとりでぶつぶつ言ってるの？ ものすごく不審人物なんだけど」

隣から突き刺さる視線の鋭さまでリアルだ。最近の夢は現実感に溢れまくっているんだなあ。まったくもって人類の進歩！

「本原くん、気持ちはものすごくわかるんだが、痛々しいからやめてくれ……」

上村（うえむら）の哀願に、俺は超重力を食らってがくりと崩れ落ちる。同い年にしては小柄な少女の隣では、やたらと目の細い男が「ほうほう」とわざとらしく頷いていた。

「あんたが『俺』か。てえことは、お隣の彼女が噂の女王様？」

「神崎苑香よ」

どうしておまえは平然としていられるのだ。いつもどおり偉そうな口調で名乗った俺の幼なじみに、変態の疑惑を持つ悪魔はにっこりと笑んで、それはそれは優雅な一礼を決めた。

「お初お目にかかる。我が名はメフィストフェレス。魔界に棲まう闇の眷属にして、人の世においては悪魔と呼ばれしもの。女王陛下におかれましてはご機嫌麗しゅう、何よりと存じ上げる」

「うむ。苦しゅうない、面を上げよ」

どうしてそんなにノリノリなのだ……。

心のなかで虚しいツツコミを入れるしかない俺の肩を、上村が無言で叩いた。

俺の記憶が正しければ、今日は新年第一日目、つまり元旦。例年のように両親や幼なじみ一家とともに、初詣に行ったりおせちに舌

鼓を打ったりお年玉の金額に唸っていたりしていたはず　　なのだ
が。

父さんとおじさんの酒盛りに無理やりつき合わされ（もちろん俺はオレンジジュースだ。未成年は飲酒禁止！）、根掘り葉掘り彼女とのことを追及されていたあたりで記憶が途切れている。

「しっかし、なんともおかしい初夢ね」

「……は？」

初……夢？

「やっぱこれって夢なのか？」

「そうじゃなかったらありえないでしょ」

彼女は呆れているというよりも馬鹿にしきつた目で睨んでくる。
ちくしょう、おみくじの『凶』がこんなところで発揮された！

「んー、正しくは夢であり現実でもあるってところかな」

メフィストフェレスはひよいと肩を竦め、狐の面に似た奇妙な笑みを浮かべた。

「夢だからこそ『ありえないこと』が『ありえること』になる。潜在意識下での現だからこそ逆説が裏返る」

「……メフィスト、言ってることがさっぱりなんだが」

こめかみを押さえながら上村が唸る。常々悪魔の言動に翻弄されているだろう苦勞が滲む姿に、涙と親近感を抑えられない。

途端に悪魔の笑顔が甘くなった。ブラックコーヒーが真っ白になるまでミルクとガムシロップをぶちこんだような。

どこにでも視覚的暴力に訴える色ボケはいるのだな……。

「そうだなあ。つまり、この夢は俺たちが眠りながら見てる夢であると同時に、共有の精神世界で起こってる現実　ってことだ」

「……………要するに、わたしたちは幽体離脱して魂だけの状態で顔を合わせてるってことか？」

「うーん。違わなくもねえ、かな」

魂までは飛ばしてないんだけどねえ、とメフィストフェレスは呟いている。どういう理屈にしろ、非現実なことには違いない。

「ぜんぜん世界観が違うんですけど……」

こちらとおたくと違ってラブコメの看板しか掲げていないのだ。

……胸を張ってそうだと言いきれないあたりが悲しいが。

「だから、それが『ここ』の法則なんだろうが。いつまでぶちぶち文句垂れてんのよ。まったくみみっちい男ねえ」

「悪かったな、みみっちくて！　ひとりくらいこういうやつがいねえとボケ倒しになるだろうが！」

「おいそのヘタレ。うちのとーこたんのツツコミじゃあ足りねえってのか？」

「とーこたん言うな！　だいたい、わたしひとりじゃおまえたちのボケなんて捌ききれないわ！」

「あべしっ」

ぶへつと奇声めいた呻きを上げて、色ボケ悪魔が地に沈む。むう、なんとキレのある裏拳なのか。

「気にしないでくれ、本原くん。きみがいるお陰で大いに助かった。特に精神衛生的な意味で」

「上村……」

俺たちはがしりと固い握手を交わした。掌から伝わる熱い友情……！

「カノジヨの目の前で浮気なんて、いい度胸してるわねえ」

「あだ、あだただだっ！　痛い痛い、耳がちぎれる！」

ぎりぎり片耳をねじ上げられ、俺は悲鳴を上げた。犯人である女王様は、目を逸らさずにはいられないような笑顔で凄んでくる。

「いつそちぎれちゃいなさいな。涙に濡れる乙女心も聞こえないよ　うな飾りものなんて！」

「俺はテレパシストじゃねええ！」

「愛の力でなんとかしなさいよ！」

そんな無茶な。愛の力でテレパシー可能なら、この世に電話は発明されていない。

どうして俺の恋人は、もう少しかわいげのある方法でやきもちを

焼いてくれないのだろうか。

まあ嘆いたところでしょうがない。女王様であることこそ、彼女の彼女たる所以なのだから。そんな幼なじみにすっかり恋してしまった、すべては惚れた弱味である。

気が済んだらしくようやく耳が解放されたところで、俺はふてくされている彼女の頭を軽く叩いた。

「あのなあ、俺が浮気するとか思ってたんのか？」

「あたし以外の女と手えつなぐなんて立派な浮気よ」

「どんだけ心狭いんだ、おまえは……」

「じゃあはじめは、あたしが目の前で別の男と仲よさそくに手えつないでても平気なわけ？」

じろりと睨み上げてくる深い色の双眸に、俺はうっと言葉に詰まった。

……かなり、いやまったくもって許しがたい。

顔に胸中のすべてが出たのだろう、途端に彼女はにやにや笑いを広げた。

「わかったらもう二度とやらないように」

「……了解」

掌の上で遊ばれているというか、頭が上がりないというか。安易に予想できてしまう未来図にため息をつきたくなった。

「……どうしよう。わたしはどうすればいいんだ」

「いやいや。まったくお熱いことで」

途方に暮れた上村とメフィストフェレスのなげやりな呟きに、慌てて我に戻る。そういえば今更なのだが、どうすればこの夢は覚めるのだ？

その疑問に、メフィストフェレス先生が実にあっけらかんと答えてくれた。

「まあ所詮『夢』だからな。肉体が眠りから覚めれば、自然と意識も現実世界に引き戻されるさ」

「それまでどうしろと……」

「こたつにでも入ってごろごろしながら、蜜柑を食べてるってことじゃない？」

ほら、と彼女が指し示した先には、大きめのサイズのこたつがでんと陣取っていた。卓上には、籠に盛られた蜜柑の山。瑞々しいオレンジ色が目にも鮮やかだ。

「え、えっ？」

上村が動揺するのも無理はない。俺たちはいつの間にか、六畳ほどの和室にいたのだから。では、先ほどまでどこにいたのかというと わからない。

明るかったか暗かったのか、暑かったのか寒かったのか。まるで霧のように朧げで、具体的な記憶を結ぶことができない。

「その場に集う意識が共通の認識を持てば、それが現実となる。いやあ、まったく精神世界ってのは便利だよなあ」

混乱したままの上村の手を引き、いそいそとメフィストフェレスがこたつに入る。専門家というのは、一般人を置き去りに順応してしまうからたちが悪い。

「ねえ。突っ立ってたってしょうがないから、あたしたちも座ろうよ」

「……そうだな」

能天気というか無邪気というか、どこだろうと揺らがぬ彼女の笑顔に、俺は脱力しながらも苦笑した。

きつとこの出会いは一期一会。どこかのだれかの気まぐれが生んだパラドックスの奇跡。いずれは覚めてしまう夢ならば、心ゆくまで満喫しようではないか。

ぬくぬくとこたつであたたまり、蜜柑を食べながらしゃべり倒す。そんな初夢も悪くない。

ではまず、この言葉からはじめようか。

あけましておめでとう！

c (A
e
f h
i a
r p
s p
t y
d n
r e
e w
a
m y
o e
f a
t r
h !
e a
y n
e d
r ,
h
a
v
e
n
i
.)

A c t ・3 完結記念 俺と女王様で『カップルに20の質問』に答えました。

決着編完結記念企画。 本編読了後推奨。

Act・3 完結記念 俺と女王様で『カップルに20の質問』に答えました。

？こんにちは！自己紹介をどうぞ。

「神崎苑香、十七歳。高校二年生よ。性別は美少女」

「なんだよ、性別美少女って。素直に女だって言えよ」

「純然たる事実なんだからいいじゃない」

「ツツコみづらいほどきっぱり断言したな！ さすが女王様……」

「なんか言った？」

「いいえ、何も言ってませんよ。だから肘で鳩尾をぐりぐり突いてくんのはやめてください！」

「まったく。ほら、さつさとあんたも自己紹介しなさいよ」

「だれのせいだと！ ……いえ、なんでもありません。慎んでさせていただきます！ ……えーっと、名前は本原はじめ。十七歳、高校二年生。性別は男」

「名前のせいで女に間違われたこともあったわね」

「余計なことは言わんでいい！」

？あれえ？お二人さん、カップルにしては離れすぎじゃないですかあ？（ニヤニヤ

「そう？ じゃあもつとくつついたほうがいいかしら」

「ちよ、ばっ、そんなに密着すんな！ もう充分近いだろうが！」

「……そんなんだから追い詰めなくなるんでしょうが」

？じゃあ、そんな事を言うあなたに質問。お相手の何処が好き？面と向かって告げて下さい！

「こ、この質問に答えるべきなのは俺なのか！？」

「当たり前じゃない？ で、あたしのどこを愛してるって？」

「なんか勝手に進化してるし！ ど、どこって言われても……」

「……思いつかないなんて言ったらぶち殺すわよ」

「そんなん考えたことねえんだよ！　なんていうか……いろんなものをひつくるめた、全部？　……いや、ちよつと待て。俺なんかとんでもねえこと言っちま」

「……まあ、今回は勘弁してあげるわ」

？ゲヘゲヘ…

「やっぱり言っちまったー！　さっきのカット、カットしろお！」

「ばっちり生放送で流れたわよ」

「ああ……」

？ああ、すみません。じゃあ告られた君に質問。ココ直せじゃこらあああ！…と、相手にぶっちゃけて下さい。

「奥手なんていうもんじゃないほどヘタレなところ。情けなさすぎてぶん殴りたくなるときがあるわ」

「精進します……」

？あああ！そんな険悪にならずに！

「別に険悪にはなってないわよ？　事実を言ってるまでだし」

「……もはやぐうの音も出ねえよ」

？あら、そうですか。デートで手をつないだりします？

「そもそもデートをまだしたことがないからな……」

「寝こみを襲われかけたことはあるけど」

「マジでそのネタを引っ張るのはやめてくれ！　ていうか俺のときは未遂だったけど、おまえこそこの間……っ」

「さーて、なんのことかしら？」

？人前でイチヤイチヤします？

「しない。絶対しない」

「むしろ『できない』でしょ？」

「放つとけ。ていうか、おまえのスキンシップが過剰なんだよ！」
「いいじゃない、そういう関係になったんだし」
「だゝかゝらゝッ！」

？他のカップルが羨ましいと思ったことはありませんか？

「周りにいるカップルが微妙だから……」

「そうねー。でも思わないわけでもなかったわ。どこかのだれかさんがあまりにもヘタレすぎて」
「……………」

？それは何故？

「いやだって、一番身近なカップルが長谷と松下だぞ？ あのふたりのいちやつきぶりつつたら一種の視覚的暴力と化してるし、しかもなんか黒いものが滲み出てるし……！」

「ある意味最強のバカップルよね」

「激しく同感」

？女の子に質問。自分の彼氏を本棚の中にあるもので例えてみて下さい。

「エロ本」

「即答かよ！？」

？男はリアクションせよ！

「よりによつてそれか？ もっとマシな本があるだろうが！」

「だって所詮、健全な男子高校生の頭の中身なんてそんなもんでしょ？」

「おまえ喧嘩売ってんだろ？ そうなんだろ！？」

「えー。じゃあブックスタンド」

「もはや本じゃねえし！」

「本棚のなかにはあるでしょうが。他人を支えようとして逆に押し

潰されるようなお人好しのあんたにはぴったりでしょ」

「……これは褒められてんのか？」

「じゃあそんな君は彼女を天気为例えるとどうなりますか？」

「台風」

「それって天気なの？」

「それは何故？」

「自分の思うがままに蹂躪してくから。主に俺の理性とかプライドとか」

「それはつまり殴られたいってことかしら？」

「事実だろ！ さりげなく拳をかまえんな！」

あと、通りすぎ

たあとの世界が驚くくらいきれいに見えるから」

「……………」

「彼氏君あんな事言っちゃってますよ？」

「ツツコミのくせに、たまにとんでもない天然発言するのよね。あれで素なんだからおそろしいわ……………」

「おまえに言われたくねえよ！」

「結婚するとしたら亭主関白とカカア天下、どちらがいいですか？」

「いいも悪いも、必然的に後者になるわね」

「反論できない自分が悲しい……………」

「チェリーボーイって可愛い響きじゃありません？」

「いきなり爆弾投下しやがった……………」

「そうね、かわいいわね。あまりにも焦れったくってこっちが食べなくなるくらいには」

「おまえも真顔でそういうことを言うな！ 頼むから羞恥心っていうものを持て！」

？彼氏君、ぶっちゃけ自分と彼女ならどっちが可愛いと思いますか？
「そりゃ……」

「断然俺のほう？」

「なんでだよ！俺のどこがどうかわいいと！？」

「そういう自覚がないところ　って、ねえ。つまりあたしのほうがかわいいって思ってるってこと？」

「へっ、あ……いや」

「どうなのよ？」

「だ、だから……」

？彼氏に踵落としを入れて下さい。

「なんでだよ！？」

「どちらかっていえば、アップercットのほうが得意なんだけど」

「おまえも悪乗りするな！」

「しょうがないじゃない。ほら、いくわよ」

「え、ちよっ……膝上十五センチのスカートでそんな……ぎいやあ
ああ！」

？彼氏君がパンツを見て鼻血を出してしまいました。彼女さん、最後にコメントを。

「ホント情けないわよねー。いまだきそんな男子高校生いないわよ？」

「これは鼻血じゃなくておまえのローファーが額にクリティカルヒットしたせいだろうが！　もはやDVだわ！」

「そこに愛があればいいのよ」

「微塵も感じられないんですけど！」

「修行しなさい、修行。少なくとも次の連載がはじまるまでには」

「なんかもう無茶とも言えねえ難題出しやがった……！」

「というわけで、そのあんだ。はたしてこいつがあたしの溢れん

ばかりの愛を感じられるようになってるかどうか、しっかり見届けなさいよ。いいわね？」

「結局最後まで女王様……」

Question by 零弦ストリップ (<http://m-pet.tv/u/?0blackluck>)

「とあるカップルについて」で座談会／男子会編（前書き）

サイトのWeb拍手の元・お礼文。男子トリオが語る主人公カップルの実態。

「とあるカップルについて」で座談会／男子会編

「……」 座談会を始める前に、まず今日の出席者を確認します。
ひとりずつ自己紹介をどうぞ。

「はいはいはい！ 二年C組演劇部所属、香坂京平です！ 好きな女の子のタイプは、おしとやかで背の低い娘！ 断じておれよりちょっとでかい男女なんかじゃない！ ちなみにどっちかという
と巨乳派だ！」

「同じく二年C組、長谷悠也です。所属クラブは文芸部です。好きな女の子のタイプは、ちょっとぽっちゃりしてて料理が上手でかわい
い笑顔でさらっと毒を吐いたりする女の子です。個人的にはあつ
てもなくてもかまわないけど、抱き心地は最高だよ？」

「いやいや長谷やん、それタイプとかじゃなくてきみのカノジョの
ことだから！ 最後に至っては断定してるから！ ってか、なんか
生々しくてやらしいよ！」

「だってホントのことだしね？ そういう香坂もツンデレ的な意味
で充分断定的だけど」

「あはは、おまえら素直だなあ。あ、俺は宮野照史。こいつらと同
じ二年C組、ちなみに部活は野球部でポジションはキャッチャーだ。
好きな女の子のタイプは……そうだなあ、すらつとしてキリッとし
たカンジなのに中身は女の子らしい娘か？ きれいな声で応援さ
れると俄然やる気が出るな。あ、ちなみに俺もあってもなくてもど
ちでも平気」

「……ねえ、長谷やん。あれって……」

「たぶん無自覚なんだろうねえ。そういえば彼女、放送部だったけ
……」

「宮野も素直だよな」

「01」 今日のテーマは「とあるカップルについて」ですが、ど

のカップルについて話しますか？

「そりゃあもちろん、あのじれじれバカップルしかないよな」

「なんたって主役だしね」

「俺らはしがない脇役だしな」

「そーゆーことを言っちゃだめじゃん！ 悲しくなるじゃん！」

「まあまあ、作者によると俺らがメインの話もそれぞれ考えてるらしいから」

「まだネタだけかよ！」

「いったいいつになることやらねえ」

「気長に待とうぜ」

「02」 その2人がカップルになったことを、皆さんはいつ頃知りましたか？

「というか、おれたちがくつつけたようなもんだよな」

「リアルタイムで（生）あたたく見守ってきたよね」

「いや、ホント長い道のりだったよなあ」

「どう見ても両想いなのに、ゼーんぜん気づかねえんだもん。本原が」

「本原だからねえ」

「本原だからなあ」

「03」 その2人はお似合いですか？ どのくらいラブラブなんでしょうか？

「お似合いとかいう以前に、お互いのことしか眼中にないよな」

「ふたりにとって、異性はこの世でひとりしかいないんだろっね」

「あゝ、納得」

「……去年の冬にさあ、学校帰りにコンビニ寄って立ち読みしてたときに、雑誌のグラビア見て本原なんて言ったと思う？」

「なんて言っただんだ？」

「『寒そう』って」

「……」

「まあ確かに、真冬に水着姿ってちょっとアレだけどさ」

「きつとそれが神崎女史だったら、茹で蛸になってトイレに直行するだろうけどね」

「あいつ、純情だからなあ」

「04」 このカップルのこんなシーンをみてしまった！

「『はい、あーん』はいつもだよ」

「膝枕と膝抱っこともしょっちゅうやってるよな」

「そういえば海の家でバイトしてたとき、本原が神崎の足の爪切ってやってた」

「……」

「こう、椅子に座ってる神崎の前に跪いてさ。おまえは中世の騎士かー！ ってツツコみたかったけど、違和感なさすぎた」

「……本原だからなあ」

「……本原だからねえ」

「05」 ここだけの話、2人がイチャついていることに腹が立ったことはありますか？

「うーん、腹が立つっていうより、こう……生ぬるゝ気持ちになるっていうか」

「微笑ましいよね。主に本原が」

「たまに胸焼け起こしそうになるけどな」

「宮野でも思っんだ……！」

「『砂を吐く』って言葉をはじめて理解したぜ……」

「無自覚って最強だよねえ」

「06」 このカップルに似合うお店や場所はどこだと思いますか？

「場所かぁ……あのふたりにそんなの関係なさそうだけどな」

「いつでもどこでもはばかってないからね」

「……それを長谷ちゃんには言われたくないと思う」

「何か言ったかい？」

「イイエ、何も言ッテナイデスヨ？」

「そうだなあ……本原んち？」

「自宅かよ！」

「ふたりつきりだと直行で帰ってるみたいだしね」

「インドア派バカップル……」

「07」 この2人はケンカはしたりしますか？また、どちらから相談された経験のある方はいらっしゃいますか？

「あれは喧嘩というべきか？」

「むしろ、肉食獣の猛攻から哀れな草食動物が必死に逃げようとしてる光景だよな」

「たいてい捕食されてるけどな……」

「基本的に本原は神崎女史にべた惚れで甘々だから、なんだかんだ言いつつ勝ちを譲るんだよねえ」

「結構幸せそうだよな」

「愚痴も相談もないもんなあ。まっ、それが一番いいんだろうけどさ」

「08」 皆さんはこのカップルを応援していますか？それともイチヤイチヤを阻害したいと考えていますか？

「いや、馬に蹴られて死にたくないですから」

「あのふたりの場合は、砂糖に埋もれて窒息死しそうだけだね」

「ま、でも、幸せそうだと恋のキューピッドをした甲斐もあるよな」

「そりゃあもちろん、そうでなかったら本気で怒るよ？」

「あれだけカリカリさせたんだもんな」

「あいつらは果報者だよなあ」

「09」 これからこのカップルはどうなると思いますか？

「え、結婚するんだろ？」

「まあ、そうだよな」

「そうだろうね」

「おれの予想だと、高校卒業したらソッコーで神崎が本原を搔っさらいそう」

「確かに、あのふたりは『嫁入り』よりも『婿入り』ってカンジだな」

「本原が専業主夫で、神崎がバリバリ稼いでそうだな」

「かかあ天下の鑑になりそうだよな」

「間違いないねえなあ」

「右に同じく」

「10」では、今日のテーマ「とあるカップルについて」のまとめをお願いします。

「総括ってこと？」

「詰まるところ『じれじれバカップル』だよな」

「宮野さん、ふりだしに戻ってるから」

「まあ妥当だよな」

「長谷やんまでそこに落ち着いちゃうんだ!？」

「他にどう言い様が？」

「うー、あー、そーなだけど!」

「じゃあ、あれか? 『俺と女王様』」

「それはタイトルですから」

「...」 お疲れ様でした。

「いやー、語った語った」

「けどなんだろう... 語り尽くしたってカンジがしないんだよな」

「.....」

「あのふたりについてだからねえ」

「ありすぎて困っちゃうよな」

「愛だねえ」

「いやいや、それをいうなら友情だから！」

「まとめると『友愛』だな」

「意外とうまい！」

「座布団何枚？」

「一枚かな」

「長谷やんてば手厳し」

「これも『友愛』だよ」

「嬉しいこつて」

Question by あなぐら (<http://99.jp>)
n.org/ag/)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3748m/>

俺と女王様

2011年6月18日13時47分発行